

5 パネルディスカッション

あの頃の、 ヨコハマは・・・ 戦後編

(10月1日開催分)



当日の様子

平成23年10月1日(土) 午後2時～午後4時30分

会場: 横浜市中心図書館ホール

パネラーより自己紹介

小林光政

(こばやし みつまさ)

出生 横浜市中区花咲町
昭和6年9月18日生まれ

現住所 横浜市西区東ヶ丘

略歴 本町小学校
神奈川県立工業高校建築科
中央大学第二商学部
小林紙工株式会社社長

その他公職 横浜の観光を考える会会長
NPO法人黄金町エリア
マネジメントセンター理事長
その他12か所役職あり

大久保文香

(おおくぼ ふみか)

出生 昭和15年生まれ
昭和19年、本牧に住む。
昭和42年、矢口台に引っ越す。

略歴 横浜紅蘭女学校
横浜緑ヶ丘高校
関内の町作りに7年携わり、
その後野毛大道芸に携わる。

藤澤智晴

(ふじさわ やすはる)

昭和22年生まれの団塊の世代。少年時代は野毛周辺も空き地だらけ。いわゆる原っぱでワルガキとして遊びまわりました。メンコにビー玉、ホンチ*…駄菓子屋に入り浸っていました。サラリーマン時代を野毛の外で12年ほど過ごしたあと、昭和56年に戻ってきました。それから、30年。柳通りで定食屋の三代目としてやっています。

人は私を「野毛のトラブルメーカー」と言います。

森直実 (もり なおみ)

出生 昭和23(1948)年
横浜市西区中央1丁目
藤棚、南太田、瀬谷、港南台、大口に居住

略歴 横浜市立南太田小学校
横浜市立老松中学校
横浜高校
武蔵野美術大学造形学部油絵科
イタリア国立フィレンツェ美術学校中退
横浜市立中学校で、美術科の教員を務め退職
1986年～2005年、野毛大道芸実行委員
2005年～、NPOヨコハマ大道芸・AD
絵画、写真など、個展多数開催
横浜市中央図書館にて写真展「横濱百景」開催
[平成23年12月1日(木)～18日(日)]

著作 『大道芸人』(編著)ビレッジセンター出版
『森直実写真集「野毛大道芸」』かなしん出版

司会：菊池 真理・黒岩 道子（横浜市中心図書館サービス課）

*ホンチ

蜘蛛を喧嘩させる遊び。1960年代まで横浜でよく行われていた。当時の子どもたちは、春になるとホンチ(ネコトリクモの雄)を求めて野山を駆け回ったとされる。ホンチのルールは唯一つ、「ホンチは自分で捕ること」だった。

○司会：それではお時間ですので、横浜市立図書館創立 90 周年記念パネルディスカッション「あの頃の、ヨコハマは… 戦後編」を始めさせていただきます。本日は御参加いただき、ありがとうございます。私は横浜市中央図書館サービス課の菊池と申します。本日の御案内役をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。(会場から拍手)

今回のパネルディスカッションなんですが、6 月に開催いたしましたパネルディスカッション「あの頃の、ヨコハマは…」の戦後編となっております。6 月には図書館の 90 周年記念ということで、90 年前の関東大震災の思い出からお話をしていきました。

その際、御参加いただいた皆様から大変多くのお話をいただきましたため、終戦を迎えたあたりのお話で、時間となってしまいました。そこで今回は戦後編といたしまして、第二回目を開催することになりました。

本日のおおよその流れを御説明申し上げます。パネルディスカッションの開催にあたり、皆様からたくさんのエピソードと写真を御提供いただきました。まず、そのエピソードを時代ごとに紹介申し上げます。また、それにちなんだ話題をパネラーの皆様と会場の皆様からお話いただくというように進めてまいりたいと思います。

パネルディスカッションといいますと、パネラーの方だけが話されるという印象が強いと思いますが、今日はみんなで昔話をしましょうというような会ですので、皆様もどうぞ積極的に御参加いただければありがたいと思います。

なお、今回は見聞きしたことをお話しいただく会ですので、こういう本にこういうふうに書いてあったとか、そのようなお話は、今日はちょっと御遠慮いただければと思います。

それでは、あいさつが長くなりましたが、本日お招きしたパネラーの方を御紹介申し上げます。まず、舞台の内側から御紹介いたします。小林光政様です。(会場から拍手)

○小林：皆さん、こんにちは。どうも。私は中区花咲町 1 丁目で生まれました。生まれた日は満州事変*が始まった日でございます。丁度私は満 80 を今月クリアできたと、ということでございます。小学校は本町小学校でございますので、友達がこの辺にはかなりおられます。現在は私、小林紙工株式会社の社長を務めさせていただきまして、ほかには公職が若干ございます。何しろ横浜のことしか知らないんですけれども、横浜のことでしたら生まれた時からのことについては若干、耳学問ですけれども、精通しているつもりでおりますので、また皆さんと仲良く話し合いをしてみたいなと、こう思っております。どうぞよろしくお願いいたします。(会場から拍手)

○司会：ありがとうございました。では、次に大久保文香様です。(会場から拍手)

○大久保：大久保文香でございます。私は昭和 15 年に東京都豊島区雑司ヶ谷で生まれました。そして 4 歳の時、昭和 19 年に父が、疎開先ということで中区本牧元町に引越してまいりました。その後ずうーっと本牧で育ちまして、結婚してから地続きの矢口台というところに今も住んでおります。その周辺のこと、及び野毛、関内についてはいろいろと関わり合いがございますので、皆様方と一緒にお話させていただければ光栄と思っております。どうぞよろしくお願いいたします。(会場から拍手)

○司会：では、続きまして藤澤智晴(やすはる)さんです。

○藤澤：藤澤といいます。えーと、私は団塊の世代の生まれなもんですから最近、とみに忘れっぽくなりまして、今日はあの、たった今、直前までですね、野毛の、「ちぐさ」*をどうやって復活させようかと、そういう話し合いの場がありましてね、つい熱中して

*満州事変

1931(昭和 6)年 9 月 18 日に中華民国奉天(現瀋陽)郊外の柳条湖で、関東軍が南満州鉄道の線路を爆破した事件。

*ちぐさ

1933(昭和 8)年に吉田衛(まもる)が開店したジャズ喫茶。かつて野毛町 1 丁目に立地し、ジャズ喫茶の草分けとなった。1994(平成 6)年に吉田が死去した後も、親族や常連客が営業を続けたが 2007(平成 19)年に、74 年の幕を閉じた。

て、このことを忘れちゃったんですね。で、さっき電話があつて、慌てて駆けつけました。そんな調子で来たんで、いろいろまたポカやるかも知れませんが、どうぞよろしくお願いします。（会場から拍手）

○司会：では、森直実さんです。

○森：こんにちは。森直実です。えーと、私は西区の中央1丁目が本籍でして、藤棚で育ちました。暗闇(くらやみ)坂*を三輪車で降りて遊んでいた記憶があります。それから学校はこのすぐ丘の上の老松中学校*でして、当時この図書館も古い建物で、ヒマラヤ杉に似た木が、今と同じにありまして、その中学生室で本を随分読みました。私の家(うち)には本が1冊しかなくて、源氏鶏太*か何かのサラリーマンものの1冊しかなくて、図書館を利用させていただいたのが思い出です。それから50年、半世紀が経ちまして、今、その図書館でこういう場所にいるっていう、不思議さを今日は感じております。どうぞよろしくお願いいたします。（会場から拍手）

○司会：ありがとうございました。それではいよいよエピソードの御紹介に入ってまいりたいと思います。皆様には御入場の際にお手元に分厚い資料*をお渡ししてあります。こちらには事前に皆様からお送りいただいたエピソードを、時代ごとに並べてあるエピソード一覧。あと、テーマごとに分けさせていただいていますエピソード。あと、こちらからうかがわせていただいて聞き取ってまいりました様々な方のエピソードが、お1人分ずつまとめてあります。また、そのあとに皆様から御提供いただいた写真を、一覧とテーマ別に分けたもの。それから写真の画像等、載せてあります。

配布資料の自己紹介の紙の次を見てくださいと、前回のパネルディスカッションのときに最後に終わってしまった戦時中の話と戦後の思い出話について、まとめたものを載せております。こちらをまず少し御紹介して、接收のお話から今日は始めさせていただきますと思います。

進駐軍による接收

○司会：では、戦時中のお話をまず御紹介いたします。事前に寄せられたエピソードといたしまして、横浜より小田原に疎開された方のお話で、「長者町に立って港まで見通すことができた」というエピソード。また、「伊勢佐木町の辺りで娼婦の方が集まってきた。また、アメリカ軍の兵士がわらじのような大きさの肉を食べていた。」というエピソードをいただいております。

そのエピソードを御紹介したところ、参加者の方から「天王町の辺りの空襲」のお話。また、「元町の現在のプラザ前に飛行機からアメリカ軍の兵士、兵隊が降りてきたこと。」「マッカーサーが厚木の飛行場*から来たときに自分が迎えに行った」というお話。また、「戦前からこの近くにお住まいで、そこからずっと今も住み続けられている」というお話を参加者の方から前回いただきました。

また次に、接收のときのお話として、「マッカーサーが来たら伊勢佐木に飛行場が出来、かまぼこ兵舎*が作られた」というお話。「自分の家の蔵がアメリカ兵に接收されて、物を持って行かれた」というお話。それから、「本牧に夜間照明のある米軍野球場が出来た」というお話を事前にいただいております。そのエピソードを御紹介したところ、パネラー方から、「接收された横浜に身を売る女の人がたくさん立っ

*暗闇坂

横浜市西区伊勢町3丁目と西戸部3丁目の境にある坂。坂名の由来は、坂の両側の木の枝が覆い被さってトンネル状をなし、昼も暗かったためとされる

*老松中学校

(地図②A-2)

*源氏鶏太

(1912~1985)
富山市出身の作家。1951(昭和26)年に『英語屋さん』で25回直木賞を受賞。『三等重役』が大ヒットし、題名は流行語ともなり、サラリーマン小説の草分けとなった。

*分厚い資料

当日配布資料を指す。「6資料集」(69~122頁)に収録。

*飛行場

*かまぼこ兵舎
(33頁参照)



ていた」というお話や、「本牧の商店の人たちが皆さん、すぐに英語を覚えて、簡単なプロウクンイングリッシュで会話をしていた」というお話や、「山手のトンネルを越えるとアメリカナイズされた街があり、日本とアメリカの生活の違いを目の当たりにした」というお話をいただきました。

では、今回はその接収のときのお話から、まず大久保さんにお話をしていただきたいと思います。大久保さん、お願いします。

○大久保：はい、私の家（うち）は三溪園*寄りのところに建っておりました。その頃の本牧は、戦前は非常に静かな漁港でしたが、終戦直後に上陸用舟艇（じょうりくようしゅうてい）*という、船自動車と言っておりましたが、本牧の海から続々と米軍が上がってきました。そして瞬く間に一番本牧の中でも平らな、一番いいところを接収して、自分たちの住所として。つまり、何でしょうね、作業を始めたということです。

本牧はそれから 36 年間、接収という憂目にあった。これは非常に本牧の発展についてはマイナスになっておりましたが、今から考えますとですね、その接収されたということから外国の、特にアメリカの文化。主に音楽ですが、それを新しい、良しとする日本の方、文化人、ミュージシャンの方が本牧を聖地のようにして、グループサウンズの人たちが来たり、それからいろいろな司会者がいたり、特異な本牧の文化っていうのを作ったような気がいたします。

そして昭和 57 年に、接収地が解除されたんですね。その直後、本牧は本当に空っぽになりましたが、また民間の施設によりマイカル本牧等ができたんですけども、残念ながら本牧は、昭和 42 年から、あの綺麗な海が埋め立てられてしまったんです。それは行政の御指導によるもので工場等が誘致されたという大きな大義名分があり、漁師の人は補償金をもらったそうですけれども、私達住民にとっては泳げない、あさり獲りができない。魚も獲れないという、一番本牧に住んでいて魅力だったところがなくなってしまったので、子ども心にも本当に情けない思いがいたしました。そんなことが本牧の接収についてはあります。

細かいことですけど私の父は食べるに困りましてですね、進駐軍の人たちに浮世絵とか、珍しい骨董品とか根付とか、そういったものをあげて、それで米軍のレーション*といひますか、あの軍事用の食糧、あんなのをもらって私達一家の飢えをしのいだ覚えが、子ども心にもはっきりとしております。そのときに初めて食べたコンビーフとかチョコレート、あの味わいは今になっても忘れることができません。で、こんな文化をもった国と戦争をしたんだから、日本は負けたのが当たり前だと、子ども心にも感じました。

***三溪園**
明治の富豪として知られる生糸貿易商、原富太郎が、各地の名建築を収集してつくった純日本式の庭園。1906(明治39)年に一般公開された。三溪園のシンボルとなっている燈明寺三重塔は京都府加茂にあった。

***上陸用舟艇**
(33 頁参照)

***レーション**
各兵員に配給される軍隊の携帯用食料のこと。

○司会：ありがとうございます。本牧にお住まいの頃の思い出ということでお話をいただきました。前に映っております写真、「本牧米軍住宅」写真映写)こちらが米軍の住宅地周辺の前景でございます。また、ほかにも、住宅の様子やお店の様子、写真でご覧いただけます。

○大久保：あの、びっくりしたのは、アメリカの方っていうのは間(あい)の洋服っていうのを持ってないんですね。中間の洋服ね。夏服の上に毛皮のコートを着て、それで歩いているのを見て、びっくりした覚えもございました。日本の文化とはかなり違うという感じがしますねえ。

○司会：会場の方の中で、どなたか本牧の辺りの思い出をお持ちだという方、いらっしゃいますか。

○男性：あのぉ、私は田舎へ疎開したもんですから、焼けた頃の横浜を知らないんですが、22 年頃に横浜へ帰ってきました本牧辺りを、あれしますと、将校の住宅だったと思うんですが、ものすごく広い芝生のところにぽつんと家が幾つかありまして、それでその将校の家族が団欒をしてんだと思うんですけども、そういうのを柵の外から我々は見てですね、非常に屈辱的な感じもしましたし、また、羨ましくも思ったのを非常に記憶しております。

本牧だけでなく、何か山下公園でもそういう将校宿舍があったらしいんですが、それは私は実際に見てませんのでわかりませんが、そういう印象が残ってます。

○司会：ありがとうございます。フェンスが張られて、仕切ってあってというお話でしたね。ほかにも本牧に限らずに接収のときの何か思い出があるというお話、ございますか。パネラーの方たちはいかがでしょうか。では、森さん、お願いします。

○森：戦後生まれの若いほうなんですが、遊びに行きますと先ほどの金網、フェンスですね。今のよりちょっとゲージが太い針金のフェンスの、白ペンキの向こう側がアメリカで、今、おっしゃられたように芝生の広いところにぽつんと多分、白っぽいような建物が建っていて、バーベキューやってましたね。それで、今考えると、あの、バーベキューなんて大したことじゃないんですが、庶民の我々にとってはすごいことをやっているなというふうに思いました。あの、串に刺してですね。まぁ、ピーマンとかね、肉のブロックですね。今考えれば単なる焼鳥みたいなもんなんですけど、あの、非常に驚いた記憶がありました。

○司会：ありがとうございます。最初の写真(「根岸米軍住宅周辺」(39 頁参照)映写)でも、やっぱり敷地が日本の家屋と比べて随分大きくとってあるなというのが見えるかと思うんですが、一番最初の写真をもう一度出していただいていいですか。大きな道をはさんで左側のところが道が広くとってあるお家ですね。このように写真からも少しわかるかなと思います。



(写真上・下)本牧米軍住宅
(1965 (昭和 40) 年) (横浜市史資料室 提供)

野毛山動物園、日本貿易博覧会

では、接収のときのお話はこれでおしまいにして、次に少し時代が進みます。昭和 26 年、野毛山に動物園*が開園いたしました。今も近くにありますが動物園なんですけれども、行かれた方も多いかと思います。動物園についての思い出話、何かある方、いらっしゃいますか。

じゃあ、最初にまずエピソードを御案内します。(市民の皆さまからの提供写真 55、56、63、64 映写)

「昭和 25 年頃、野毛山動物園にいたくはま子*が野毛を歩いたんだ。今にして思えば港に着いたはま子を運ぶ手段がなくて、港から野毛山までずっと歩いてきたんじゃないかな。丁度見ていた自分をはま子に乗せてくれたんだ。半ズボンをはいてたんだけど、象の皮膚って硬くてザラザラしていて、硬い毛が生えているんだよ。それがチクチクして痛かったなあ。」藤澤さんからいただいたエピソードでした。

○藤澤：そうですね。あのお、私が当時 4 歳ですね。当時の記憶というのは、まあ、皆さんもそうでしょうけれど、ほとんどないですよ。ですけども丁度、あの今の野毛の商店街。都橋を渡って野毛山に至るあの道ですけどね。あの途中で見てたんですね。誰かが象さんの上にポーンと乗つけてくれたんです。びっくりしましてね。象さんっていうのは遠くから見るとすべすべのように見えますけども、実はすごい毛むくじゃらだったんです。半ズボンでね、乗つけられたもんですから、すごい毛がチクチクして痛かったことを覚えています。野毛山へ来た、この間、はま子が、いつでしたかね、亡くなったんですね。記事が載ってましたけれども、あー、あのはま子が死んだのかって、すごくあの、感慨深く思ったことを覚えています。

○司会：ありがとうございます。では、ほかにもエピソードをいただいておりますので、そちらを御紹介します。「昭和 30 年代、町田から遠足で野毛山動物園やマリンタワー*に来た。あの頃は動物園といえど上野か野毛山動物園だった。」「野毛山動物園に陸橋ができたとき、息子がテープカットをした。息子が幼稚園の頃で、野毛山幼稚園の子ども達でテープカットを見に行った。10 年前の冬には孫が野毛山動物園のリニューアルのテープカットに行ったから、親子二代で野毛山動物園のテープカットに行ったわね。」このようなエピソードが事前に寄せられております。

野毛山動物園のエピソード、どなたかお話しになりたいという方、いらっしゃいますか。では、どうぞ。

○男性：野毛山動物園の開園が、書かれていますように昭和 26 年ですけども、その前に、年配の方は御存知だと思うんですけど、確か復興博覧会っていうのがあったんですね。それは日本もだんだんと、戦後にいろいろなものができるようになったということで、第一会場と第二会場に分かれて、どっちが先だったかは忘れちゃったけれど、まだ野毛山公園が整備されてなかったんですね。今の、こちらに貯水池があったところ、ありますよね。あの辺りが中心になって会場が。あと、反町の今のスケートリンクがある辺りだったと思うんですけど、あそこが第二会場だったと思うんですけど。

で、のちにそこに市役所が一時移るわけですけど、私は多分、あれは昭和 24 年だったんじゃないかと思うんですけど、小学生でしたけれども、何が一番印象に残ったかという、ひとはテレビですね。あそこで放映したんですね。テレビは戦前からアメリカなんかではあったんですけど、日本でもあったらしいんですけど、テレビで関東学院*の方をずーっと、こう、見せてですね。で、何かね、小学生なんかは舞台上で歌を歌うのを見せてくれたりして、みんな驚いてですね、テレビがこんなに盛んな時

*野毛山動物園

1951(昭和 26)年開園。横浜市西区にある動物園。震災前は横浜の富豪・茂木惣兵衛の別邸で、その起伏に富んだ地形を利用して動物を収容している。2011(平成 23)年に 60 周年を迎えた。



*ゾウのはま子(絵葉書『ヨコハマ野毛山遊園地 動物園もある子供の楽天地』より)(1941-1964)(横浜市中央図書館所蔵) 雌のアジアゾウ。1951(昭和 26)年から野毛山動物園に在園し、2003(平成 15)年 10 月 7 日に老衰のため、推定 59 歳で死亡した。

*マリンタワー

横浜開港 100 周年記念事業の一環として、市民からの発意により建設が計画され、1961(昭和 36)年に完成。2009(平成 21)年にリニューアルした。

*関東学院

1884(明治 17)年創立。1946(昭和 21)年金沢八景に旧制専門学校及び中学を移転した。1949(昭和 24)年に関東学院が設置された。

代じゃなかったですから、これ一体何なんだろうっていうことをですね、感じたことがあります。

で、そのあとからだんだんと、いわゆる復興ということで貿易も盛んになっていったんだと思いますけども、あとはあの横浜の、丁度今のあそこの貯水池のすぐそばに天文台が作られたんですね。で、その天文台っていうのは結構大きなもので、あの、私達にも見せてくれたんですけども、やっぱりその時、驚いたのは、子どもだからわかんなかったんですけど、天文台の望遠鏡は逆さまに見えるわけですね。それで丁度あそこからですと今の浦舟町の交差点辺りに焦点が当たってまして、7番の当時の市電がこんな大きくですね、見えたことを覚えています。

で、それからもずっと天文台、だいぶ残ってまして、行事があって、いろいろなことが催されたと思いますけど、そのあとに多分、公園がきちんと整備されたりして、日本も変わっていったので、あの復興博覧会って意外と忘れられちゃってんだと思うんですけども、結構賑やかでいろいろなことがやられたのを覚えてます。今回、どなたも書いてなかったんですね、ちょっと付け足させていただいた。

○司会：ありがとうございます。テレビを見られたお話だとか、動物園に限らず出てきましたけれども。じゃあ小林さん、お願いします。

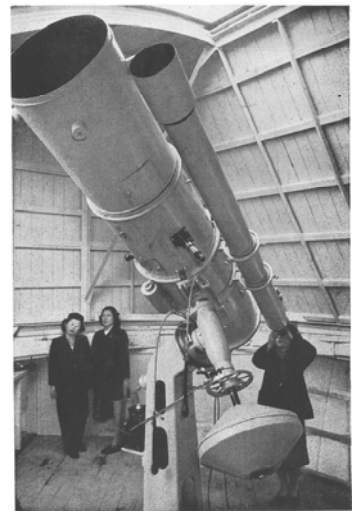
○小林：そうですね、復興博覧会っていいですか、貿易博覧会*っていうかたちで昭和24年に行われました。で、第一会場、メイン会場は野毛山でございまして、第二会場が反町ということです。

まあ、先ほどテレビの話が出ましたけれども、私も並んで見まして、やっとカタカナの「イ」という字*がですね、かすかに出てきたというのを私は見ました。あの、そんな経験をもっています。

今の迎賓館っていうのが建物に変わってますけど、その前の迎賓館、結婚式場だったわけなんですけども、それは当時、迎賓館として大勢の方の、貴賓室として使われたものを、民間の方がお買いになって、横浜迎賓館としてお使いになったと、こういうことですね、はい。そんなことしか覚えておりません。

○司会：今、天文台のお話をうかがったんですけども、こちらの方でも初めて聞くっていう声が挙がったんですけど、私もあの博覧会の話はよく耳にして、見たわけじゃないです。耳にしていたんですけど、その、天文台のお話、ほかに御存知の方、どなたかいらっしゃいませんか。前から三列目の御主人、いかがですか、御存知ないですかね。天文台っていうのはあまり聞いたことがないんですけど、どなたか御存知の方、いらっしゃいませんか。パネラーの方でも天文台って、あまり御存知ないですか。野毛山の展望台*でしたら私も存じているのですが。

○小林：展望台でしたら二世が出来上がりました。三階建ての展望台があるんで



日本貿易博覧会の天文館（野毛山会場）（『日本貿易博覧会』（日本写真文化協会、1949年刊）より）当時、日本最大となる口径50cmの反射望遠鏡がすえつけられた。



第一科学館（野毛山会場）におけるテレビジョン実演の様子（『貿易と産業』（日本電報通信社、1950年刊）より）

***日本貿易博覧会**
1949（昭和24）年3月15日～6月15日開催。博覧会の呼物として野毛山会場の第一科学館においてテレビジョンが展示、実演された。新聞紙大の画面に、直接投影させるテレビであった。

***「イ」という字**
1926（昭和元年）年12月25日に高柳健二郎がブラウン管上に「イ」の字を写し出すテレビ伝送実験に成功し、1927（昭和2）年には特許を申請した。高柳は日本のテレビの父と呼ばれている。

***展望台**
1966（昭和41）年に設置されたが建替えられ、2011（平成23）年8月1日に二代目展望台としてオープンした。

すね。あれは確か40年代になってから出来たと私は思ってまして、46年に私が撮った写真があります。大変見晴らしのいいところですね。今、二代目が出来上がりまして、今度はエレベーターも付いておりますので是非皆さん、展望していただければありがたいなと、こう思っております。

○司会：ありがとうございます。ほかにも、自分もこういうのを見たよというお話、もしあればお聞かせいただきたいなと思うんですけども。じゃあ、どうぞ。

○男性：すいません、ちょっと時代は下っちゃうんですけど、昭和30年代に元町小学校で、だいたい2年生のとき、遠足は野毛山動物園と掃部山(かもんやま)*が定番なんですよ。今も多分そうかな。で、1年のときは三溪園。

わけわかんないのに行かされて、僕たちはとにかく三溪園でも池の魚を獲ろうかという感じで(笑)、建物なんかは全然注意してなかったんですけど、それで今、ちょっと野毛山で思い出したのが、やっぱり動物園に入ったときに、その、マントヒヒ*がですね、こう、木のところの大分高いところからおしっこをしたんですよ、見学の人に。すごい何かそれが印象的で、学校に帰ってから絵を描かされるんですけど、私はそのマントヒヒがおしっこをしたところを描いて、で、ほかの絵の上手い子は、やっぱりはま子ですよ、象を描いたりで、僕は何故かそこだけがすごい印象に残ったんで、そんなのを描きました。それとあと、ゴーカート。知り合いに連れられて、遊園地の方

ですけど、色とかそういうのは全然覚えてないんですけど、とにかくカートってのかな。その、こうハンドル持ってて、とにかく下手くそでだめなんですよ。すぐぶつかっちゃって、ゴンゴンゴンゴン。で、ちなみに後ろからハンドルを持ってもらって、やった覚えがあって、そのときにも将来、車の免許なんか取れないなと。その時、小学校1年だったと思いますけど、いま、大型とかいろいろ持ってますけどまあ、乗れるんだなということがわかりました。(会場から笑い)

○男性：私も横浜市の生まれで、ずっと育ったんですけど、まあ、小学校の低学年のときにはやっぱり野毛山の、あの遊園地で飛行塔とか、そういったものがあるときに来た覚えがありますし、あと、野毛山地区のどのエリアか忘れちゃったけれど、老松中学校のそばかなあと思うんですけど、その頃やっぱり野球が流行っていました。その頃、紅梅キャラメル*って御存知ですか。今はないですけどね。紅梅キャラメルを買ったとカードが付いてまして、それにジャイアンツの選手のカードがついていて、それをいっぱい貯めるといって、そういった子どもの遊びがあったということですね。

それから、あとは、私の個人的なあれですけど、図書館の、今、敷地の中に入ってしまったんですけど、老松会館*。ここは私が式を挙げた場所です。そんな思い出が野毛にあります、今は、この近くに住んでます。

○司会：とても大切な場所なんですね、野毛が。ありがとうございました。あの、そのカードのときに随分皆さん、御反応がありましたけれども。

○小林：貿易博覧会のあと、そうですね、遊園地になったんですね、一時ね。ですから

*掃部山公園

横浜市西区にある公園。横浜みなとみらいを見下ろす高台にあり、園内には横浜開港に関わった井伊直弼の銅像が立つ。

*マントヒヒ

野毛山動物園にマントヒヒ舎ができたのは1957(昭和32)年10月のこと。現在はアカエリマキツネザル舎となっている。



野毛山遊園地のゴーカート

(絵葉書『ヨコハマ野毛山遊園地 動物園もある子供の楽天地』より)
(1941-1964) (横浜市中央図書館所蔵)



*紅梅キャラメル

(『さようなら紅梅キャラメル』(沢里昌与司/著、東洋出版、1996年刊)より) 巨人軍のプロマイド入りで、一箱10円で販売されたキャラメル。昭和20年代後半に販売され、わずか6年で消えたと言われる。一チーム分集めると野球道具一式がもらえた。

*老松会館

(13頁「震災記念館」参照)

そういう思い出をかなり皆さん、お持ちだろうと、こう思います。

○藤澤：あの紅梅キャラメル、なかなか水原監督*が出なくて、全部揃わないんですよ。あれを売っていた駄菓子屋さん、<なまこや>*っていいですけど、今でも残っていますね。あの岡川のすぐそばで、<かもめ座>*という映画館があったんですけど、その真ん前。今でもあるんですよ、ええ。是非、駄菓子屋さんに寄ってあげてください。（会場から反応）

○男性：あの、紅梅キャラメルの話って懐かしいとおもうんですけど、さっきの方がおっしゃったのはですね、こういうことがあったんですよ。そこの今の平沼さんの家がありますよね。あの辺に何か来たんですね。で、それで何をやったかっていうと、紅梅キャラメルが主催して今の関内ホール*になっているところが、昔あれ、東宝*だったと思うんですね、映画館だったんですけど。そこでですね、選手が。川上選手とか千葉選手とか青田選手とか、みんな古い人ですけど、来てですね、あそこで何かイベントがあったんですね。私は近いもんですからそこまで見に行き、野球の選手ってこんなに体が大きいのかってのを覚えてるんです。で、それからずっとぞろぞろついて行って、その、今の関内ホールに横浜東宝か何かあったんですけど、そこでイベントがあって、サインボールを投げたんですね、選手が。私は拾わなかったんですけど一緒にいった友達が拾ってですね。ちゃんとしたサインが入っているボールでした。当時、珍しいものだったので喜んだ記憶がありますし、とにかくあの頃、小学生は紅梅キャラメルばかり買って、さっきの方がおっしゃったように、なかなか出ないんですね。実はホームランっていうのが一枚、一番何点かなりまして、何点か貯めると今、おっしゃったように岡川の近所に交換してくれるところがあって、私なんかも歩いてよく行ったことがありました。ちょっと余計なことですけど。

○男性：えー、ちょっとあの、子どもの遊びが出ましたんでね、古くなった話をさせてもらって恐縮ですが、私は宮川町に住んでおりまして、丁度戦前のときに小学校へ入ったんですが、そのときは尋常小学校っていうんじゃなくて、国民学校って言ったんですよ。その老松小学校に入りましてね。学童疎開して。で、戦争が終わる前に戻ってきて、こちらで、焼け野原の中で子ども生活を送ったんですが、そういう中でやはり、まずマッカーサーが来たときにですね、女、子どもは大変だっていうんで、すぐみんな街の人は逃げましたですね。半月ぐらいして、安心だって戻って来て、それからまあ、先ほどの「ギブ ミィ チョコレート」だとかね、そういうことだったんですが、子どもの遊びとしましてはですね、丁度イタリアで『自転車泥棒』*っていう映画があったわけなんですけども、自転車の輪っかを外しましてね、あれをこう、回す遊びが流行ったと。

それから、えーと、吉田町の関内ですね、まだかまぼこ兵舎がなかったんで、あの辺はもうまるっきり焼け野原の中で、磁石を使って、その、何ていうんですか、あれ、砂鉄といいますかね、そういうものを紙の上にまいて、磁石を下から動かしておどる様子を見るというような遊びとか。それからメンコ遊びで高校、当時は旧制中学とか学芸、えー、民間の実業団かな。それから映画のスターですよ。これがメンコ遊びですね。先ほど出た紅梅キャラメルもそうですが、メンコ遊びとベーゴマ遊び。こういうものとビー玉。これが男の子の遊びの三種の神器です。まあ、こんなようなことで遊んだと。そんな思い出でございます。以上です。

*水原監督

(1909～1982)

水原茂。現役時代は巨人で活躍し、引退後に巨人監督に就任。11年間に8年ものリーグ優勝を達成した。その後は、東映フライヤーズ、中日ドラゴンズの監督を歴任した。

*なまこや

*かもめ座

(地図②B-2)

*関内ホール

(地図②C-2)

前身は横浜宝塚劇場。接収をまぬがれ1945(昭和20)年活動を再開、1953(昭和28)年に洋画専門館へ移行した。テレビの普及で観客が減り、1969(昭和44)年に閉館し、1970(昭和45)年横浜市民ホールとして再出発した。

*東宝

(地図②C-2)

横浜東宝会館。現在の関内ホールの斜め向かいにあった。1956(昭和31)年に馬車道に開館した。ひとつのビルに4スクリーン(のちに5スクリーン)をもち、「映画のデパート」と呼ばれた。

*『自転車泥棒』

1948(昭和23)年に公開されたイタリア映画。戦後混乱の都会で、唯一の商売道具の自転車を盗まれた父子が、丸一日その行方を捜し歩く。当時のイタリア庶民の姿を描き出し、アカデミー外国賞を受賞。

露天商の登場

○司会：ありがとうございました。子ども時代にこういうふう
に遊んでいたというお話を聞く
ことができました。では、野毛
山動物園が昭和 26 年に開園し
まして、その頃、野毛の街にも
登場していたものがあります。
露天商が野毛の街に登場してお
りました。写真にも写っており
ますが道の脇に露天商が並んで
おりました。まず、事前に寄せ
られたエピソード、紹介させていただきます。

「野毛には大きい店はなく、小さい商店が多くあり、自分で買物用の籠を持って商品
を買って回っていた。おせんべいや飴も 1 個ずつバラ売りしていた。木造りのアーケー
ドや露天商もあり、賑やかだった。露天商はバスが通るときに邪魔になるので、なくな
ってしまった。都橋の横の 2 階建ての建物*に移り、今も残っている。夜遅く露天商に遊
びに行ったりしていて、楽しかった。食べものも着るものも、やかん、鍋、日用雑貨も
野毛にいれば何でもそろった。」というエピソードをいただいております。

ほかにも、「昔は露天商が野毛の大通りから都橋までずうーっと並んでいたが、それが
なくなったのがこの辺りの一番大きな変わったこと。露天商には食べもの以外のほとん
どのものが売ってあった。今の<にぎわい座>が中区の税務署だったけれど、露天商に
は判子も売ってあった。露天商には何でも売ってあって、どの世代の人も買いに行っ
ていた。露天商がなくなったのはオリンピックの影響。」ほかにも、「昭和 39 年のオリンピ
ックを機に、露天商を都橋沿いの建物に押し込めた。」というエピソードをいただいております。

それでは、会場の方からお話をいただきたいと思います。露天商が並んでいた野
毛の様子、御記憶にある方、いらっしゃいますか。これは都橋の方から見た野毛本通り
の様子です。昭和 37 年に撮影された写真です。では、小林さんにちょっとお話をいただ
きたいと思います。

○小林：私は丁度、終戦の年が 14 歳でございました。家族が多くてですね、兄弟が 6 人
おりまして、次男だったもんですから、私まではどうしても生計を立てるために働かな
ければならないと、こういうことでございまして、働きながら学校へ行ってた、こ
ういうことでございまして、その働きながらは一体何を働いたのかといいますと、露店を、
お店の番をしてたと、こういうことでございます。

まず最初からお話をいたしますと、私の父が美濃から美濃焼を、しょって買ってきま
した。それを米軍相手にですね、お土産として売ろうじゃないかと。で、一体どこで売
ったらいのかということで一番その、米軍が一番通るところが当時、馬車道*だったん
ですね。で、その今は神奈川県立博物館になってますけれども、その当時は正金(しょう
きん)銀行*だったんですね。で、その通りの歩道の上でですね、風呂敷を敷きまして、
そこに水差しとか花瓶とかですね、あと湯呑、ポットとかですね、そういうものを並べ
て。これは戦前、アメリカへ輸出していたものですね、途絶えて、ですからアメリカ



都橋から見た野毛本通り (昭和三十七年)
(広瀬始親氏撮影寄贈・横浜開港資料館所蔵)

*都橋の 2 階建ての建物

都橋ビル(地図② B-2)を指す。1964(昭和 39)年に建設された。露店 62 店がこのビルに入居した。これにより野毛に残っていた露店がすべて街から消えた。

*馬車道

1867(慶応 3)年頃、開港場としての横浜が町を整えていく中で、商店が競うように、柳や松を植え、これが近代的街路樹のはしりとなった。さらに、1872(明治 5)年、日本で最初のガス灯が設置された。

*横浜正金銀行

貿易通貨(正金)の供給・流通を促進する機関として 1880(明治 13)年に本町 4 丁目開業、1904(明治 37)年に南仲通に移転し、八角形のドームをもつ、ネオ・バロック様式の壮麗な本店が落成した。現在は神奈川県立歴史博物館(地図② C-2)。国の重要文化財・史跡に指定されている。

人には大変好まれる、全体は赤であり、模様が全部、金でできてるんですね。ですから、米軍の人たちは競って私のものを買ってくれたんですね。持って来るのが間に合わないくらいの繁盛をしたんですが、で、たまたま父と私でやってたんですけども、父は戦前、ちょっと英語を勉強してましたので、英語ができた。それを私が聞いて片手間の英語で売ってたんですけども、ある日、父が事情がありまして、私だけで商売をしました。そこへおそらく市の人だと思うんですけど、坊や、こんなところで商売をしてはいけないよということで、今、野毛でこういう露店をですね、集めているから、すぐに野毛に行きなさいということで、私は店をしまつてですね、正金銀行の小遣いさんをお願いをして、父が来たらば野毛に行ったと伝えてくれという具合に言づけをしてですね、野毛に行きました。

もう夕方近く、4時頃でございまして、うろうろして場所を探そうと思っていたんですけども、もうほとんど大人の人たちが占拠してまして、場所がなかったわけですね。ところが泣き出しそうな顔して途方に暮れてたら、ある人が声をかけてくれました。坊や、何しに来たんだと。場所を取りに来たんだと、こう言いましたところ、それじゃ俺の隣へ焼けトタンを敷いて、10枚ぐらい敷いてその上に座ってなさいと。こういうことでした。何故、その人が声をかけてきてくれたのかといいますと、やたらに広くは取れなかったんですね。募集はあくまでも一間(いっけん)。ですから1メートル80センチですね。その間口しか取れないということがわかって、余分にとったので私にその分を分けてくれたと、こういうことで、大変な恩人なんですね。それからその日のうちにですね、屋台を作りまして、私はその上に寝てしまったんですね。で、夜の11時頃になりましたら父が見つけてくれまして、無事にそこに掘っ建て小屋を作つて、商売をそのあくる日から始めたわけですけども、一体何を売るのがかって。まあ当初、その花瓶とかですね、水差し、そういうものしかなかったんですけども、紙関係の仕事をしていましたので、紙のルートはあったもんですから、そこからいろいろなチリ紙とかですね、障子紙とか、そういうものを美濃から仕入れまして、売り始めたんです。間口一間で、です。それを始めたのは昭和20(1945)年、終戦の年の11月でございます。ですからもう寒かったですね。で、お店はどちらかといいますとこの大通りの方に向かって商売をしているということからスタートしました。

それからもうひとつ、その、所場代(しょばだい)といいましょうか、場所代ですね。おそらく市の代理をしている人だったんだらうと思いますが、町の代表の方が場所代を取りに来たわけですね。で、それは電灯一灯についていくらということで毎日、料金を払いました。それから約1年経って昭和21(1946)年の11月にですね、うちの店は、今度は向きが変わりました。今度は歩道に。今、これ見ますと(45頁写真)歩道に向かって商売をしますけれども、そういうかたちになります。といいますのは、商売を前からやっておられた方が徐々に帰って来られて、本建築でお店を作るようになったんですね。ですから真向いにはちゃんとしたお店が、私どもの露店の前にあって、挟むようにして歩道をお客様が歩くという。多少、もう車も通るようになってましたので、それで向きを変えたということになります。それは昭和21(1946)年11月でございます。その頃になりますと所場代というのは電灯一灯ではなくて売上げ歩合、売上に対して何パーセントということで日々、上納してた、と、こういうことでございます。それは多分、おそらく税金もですね、その中に入っていたんだらうと思うんですね。実際に私も15歳ですから、まあ、税金の問題も父がすごく悩んでましたので、日々インフレでどんどんどんどん、毎年毎年、税金の額が上がってくるというように父がかなり苦しんでおりましたので、私自身も、これは税金も入ってるんだと、そんなことを思いながら店番をしてました。当時の学校は二部制でございまして、私は午後番でございまして、午前中に私が露店をやり、

午後からは兄が替わると、こういうことで兄弟で3年間、露店をやりました。

その中で一番、私どもで儲かったものは何かというのをちょっとお話しいたしますと、煙草を巻く紙ですね。皆さん専売公社*からはですね、<きざみ>しか配給がなかったんですね。実際、どうやって吸うんでしょうか。煙管(きせる)ではちょっと小さすぎますし、そこで朝鮮煙管というのがですね、かなり出回ったんですね。これはマドロスパイプぐらいの容量のものがあまして、日本の煙管と同じように、真鍮でできているんですね。竹の、羅宇(らお)*っていうんですかね、それが付いてまして、それで吸うと、きざみでも吸えるわけですけども、紙の配給がなかったんです。そこで私どもの父が、紙を切るのが専門ですので、小さく煙草の大きさに切ってですね、お店へだしたところ、飛ぶように売れまして、大変実は儲かったわけですけども、ある日、専売公社に父が捕まりまして、これは専売公社法違反だということで一日留置をされたんです。そこで、私はもらい下げに行きました。このきざみだけを持ってきて煙草を吸ってくださいということですが、どうして吸えるんでしょうかと聞きました。そうしましたら、紙がなければ吸えないと、こういう答えが来ましたので、その紙を供給してんのに何故悪いんだということですね、私は赤ペンでサインをして、二度と売りませんということを誓約をして、父をもらい下げをしてきた、そんな記憶があるわけでございますけども、そういう具合に大変変わった時代でございました。私は学校でやはり勉強しなけりゃならないので、3年間で露天商は辞めさせていただきました。(笑)

○司会：ありがとうございます。露店に直にお店を出されていたという小林さんのお話を聞くことができました。会場の方で何か買ったとか歩いたことがあるとか、ございますか。

○男性：今、ここに出ております、そのちょっと前の写真を出してくれませんか。(45頁写真映写)自動車は2台走ってます。2代目の左側に何とか株式会社って書いております。それは稲垣薬品っていう会社です。

私はその頃ですね、昭和33年頃に、その会社におりました。それからずっといたんですけども、うちの会社はですね工業薬品を主に売っておったんです。で、工業薬品を売ってる中にですね、重曹、御存知でしょうけれど重曹がですね、あれ一袋が25キロとか50キロっていう袋なんです。でもこれ、普通にいえば売っちゃいけないと。切符がなければ売れなかったんです。ところがうちの前に出てる露天商の方はですね、ほんの少しをですね、すごい値段で売るんですよ。私のところでその25キロ一袋を売るよりも高い値段なんです。(会場から笑い)ですからね、いくら何でもこりゃひどいじゃないかというような思いがございました。以上です、どうぞ。

○小林：大変申しわけございません。(会場から笑い)

○司会：ありがとうございます。ほかの方はどなたかいらっしゃいますか。

○小林：では、私の方からひとつ。私が丁度露店をやっているときにですね、これは確か昭和21年の春だったと思いますけれども、新円切替(しんえんきりかえ)*というのを皆さん御存知でございましょうか。えー、それまで戦前から使ってたお札とか硬貨、硬貨は使えたんですけども、お札に関してですね、新しいお札に替えるという通知があったんです。これはおそらくインフレを抑えるためのものだったのでしょうか。実際に銀行に取り換えに行っても、当時100円まで。100円というと当時、まあ、月給ぐらいなんですね。100円ぐらいまでは取り換えられたんですけど、それ以上は取り換えられない。あとは銀行でその預金の方は全部作り替えるということです。それ、御記憶の方はおら

*専売公社

1949(昭和24)年に大蔵省の外局である専売局を大蔵省から分離独立させて発足した特殊法人であり、国家が全額出資する公共企業体。1985(昭和60)年に日本たばこ産業株式会社(JT)が設立され解散した。

*羅宇(「らお」又は「らう」)

竹で作られた煙管の中間部の名称。雁首(きせる)の火皿の付いた頭部)と吸い口をつなぐ。

*新円切替

1946(昭和21)年2月に発令された通貨切替政策に対する総称。戦後のインフレーション対策として行われた。流通している日銀券をすべて一度銀行へ預け入れ、新円と交換する。払い戻し額は、1か月につき世帯主300円、家族1人につき100円までというものであった。

れますか。ああ、やはりおられますね。じゃあ、そのお客さんの方から御意見を聞いていただ
いて。

○司会：そうですね、はい。では、前の方、お願いします。

○男性：私はまだ子どもでしたから新円の切替ってことの意味は全くわからなかったんですけ
ども、親父が税理士をしておりますして、昭和 19 年の 8 月に、私は徳島へ強制疎開したんです
が、親父はまだ仕事があるもんですから横浜に残ってたんです。えー、はっきり記憶がないん
ですが昭和 20 年の 2、3 月頃になって親父はもう、住まいは豆口に住んでたんですけども、その家
を売っちゃって、戦争が激しくなってきた危ないからってということで田舎へ引き上げちゃった
んですね。それで田舎、徳島へ帰っちゃったんですが、それで、終戦になってから昭和 21 年の
半ば頃に、横浜へ親父は先に帰って来たんだと思うんですが、それでどういうわけだかよくわ
かんないんですけども手紙が来て、徳島の銀行へ、淡路銀行っていう銀行へ行って、それで
その預金をどうかしろとかと言われて、はっきりした記憶がないんですけども、それが新円
の封鎖の手続きか何かだったらしいんですが、生まれて初めて私、銀行へ行ったのもそうで
し、その新円切替でどうかって言って、お金が封鎖されちゃって使えないんだよって
いうような話を中学 1 年になったばかりのときですから、経済のことなんかさっぱり、お金のこ
となんかさっぱりわからないんで、何かよくわからないけれども、そういうことで銀行へ行
かされたっていう記憶がありまして、それが新円の封鎖の、預金の手続きだったらしいってこ
とが、記憶に残ってます。

○小林：ありがとうございます。新円の切替のときにですね、大金持ちの人は実は品物を買っ
ちゃうんですね。その期日がありますからその前にその、お金をどんどん使っちゃうんです。
品物で持っていたわけですね。で、後から売るといふ。これはひとつは脱税防止でもあったん
だろうと思いますし、皆さんの財産を役所が管理する、一番の基になったんだろうと思います。
で、ちなみにあの、新円のデザインは皆さん、御記憶でしょうか。十円*でいいますと米国(べ
いこく)という日本的なデザインなんですね。ブルーと紺で印刷されてまして、まだ印刷がそん
なにできない頃でございまして、これ、新円と替える量がなくてですね、新円がなくて、シー
ルを皆さんに配布して、旧紙幣にシールを貼って*流出をさせたと、こんなことも実は私、覚え
ております。以上でございます。



*新円切替時に発行された十円券(写真出典：日本銀行ホ
ームページより)国会議事堂を囲む模様が「米」、その右
が「国」の字に読めたことから「べいこく」とも呼ばれた。



*シールを貼って流通(写真出展：日本銀行金融研究
所ホームページより)

新円紙幣の印刷が間に合わないため、回収した旧円
紙幣に証紙を貼り新円として流通させた。証紙付き
紙幣は後に新紙幣との引換えが行われた後に廃止さ
れ無効となった。

○司会：会場でもうなずいていらっしゃる方が何名かいらっしゃいますね。では、ちょっと写
真を御紹介します。今、お見せしているのは野毛の本通りに並んでいる露天商の写真なんです
けれども、都橋に入ったあとの写真がありますので。これですね。(「野毛都橋商店街ビル」写
真映写)都橋商店街ビルに露店が入ったあとの写真です。昭和 40 年の、これは撮影された写真

ですね。手前の方は靴屋さんですかね。

では、露店に限らず、野毛の昔の生活について少しお話をしてみたいと思います。パネラーの方でどなたか、昔の野毛の生活の様子、遊びの様子、御紹介いただけますか。

○藤澤：私が覚えているのは昭和 28 年頃ですね。昭和 30 年になる前ですね。まだ物が少なく、で、うちは飲食店を経営していたんですけどね、米がなくて。配給だと間に合わないんで闇屋さんに、お遣いに行かされました。近くに闇屋さんがありましてね。そんなのだとか、それからお酒も足りなくてですね、しょっちゅう水で薄めてました。いや、今はそんなことしてません。（会場から笑い）お客さんもそれ、ちゃんと知ってましてね。あの、あまり今日は薄めないでとか言って、うちのお母さんが「はいはい」とか言いながら、でも、適当に薄めて売ってたのを覚えてます。何しろ物がなくて、本当にやりくりして、基本的な食品がまだ昭和 28 年頃でも十分でなかった。そんな感じをもちました。

横浜市の六大事業

○司会：では、野毛もこのように変わってきまして、昭和 39 年に東京オリンピックが開催されます。これを機に街がどんどん変わっていきました。街が変わっていった様子について、すいません、続けてなんですが、小林さんに少しお話をいただければと思います。

○小林：あの、丁度横浜市ではですね、この、『港町・横浜の都市形成史』*という横浜市から発行されている本があるんですけども、開港当時からずうーっとですね、何年から何年までは何ていう期だとかですね、そういうことなんですが、実際にその戦後、昭和 20 年から 35 年までをですね、戦災復興期という具合に名付けております。それから 36 年から 53 年までをですね、都市成長期と、実はこういう具合に区分けをしてるんですね。

で、昭和 20 年から 35 年っていうのは戦災復興期。これはもう当然、35 年は池田内閣*のですね、所得倍増論が発表になった年でございますので、正にこういう復興はですね、だいたい終わったと、こういうことでございまして、36 年から 53 年で、何故 53 年なのかと、こういうことですけど、この間は都市成長期なんです。で、53 年はですね、横浜の人口が 270 万人になってるわけございまして、大阪、勿論名古屋も途中で抜いて大阪を抜いた年が 53 年なんですね。

で、そういう中で実は後々（あとあと）、オリンピックから現在までの中にいろんなお話が出てくるわけですけども、その基本的な成長期にですね、横浜市の将来をどういう街にするかということで、いろいろ議論がございます。で、その中で横浜市はですね、六大事業*という計画を立てました。で、これを実際に実行することになったわけございまして、この六大事業についてちょっとお話しさせていただきます。



露天商が並ぶ野毛本通り（昭和三十九年）
（横浜市史資料室提供）



野毛都橋商店街ビル（昭和四十年）
（横浜市史資料室提供）



*『港町横浜の都市形成史』

横浜市企画調整局/編、横浜市企画調整局、1981年発行

*池田内閣

池田勇人(1899～1965)を内閣総理大臣とする日本の内閣。池田は第58～60代内閣総理大臣に就任した。

*六大事業

横浜市中心部の再生と活性化を目的として昭和40年代から進められた事業で次の6つの事業を言う。①みなとみらい地区造成、②金沢地先埋立、③港北ニュータウン開発、④高速鉄道(地下鉄)整備、⑤高速道路整備、⑥ベイブリッジ建設。

まず、港北ニュータウン*ですね。で、これは、人口急増地域でございますので、そのまま放置をしますと、どんどんどんどん住宅地になってしまう。で、せっかくの田園風景っていうものがなくなるといことですね、やはり網をかぶせまして住宅地と農地、そういうものをきちっと区画をしてですね、将来の発展に期そうといこと、この港北ニュータウン構想が生まれました。で、現在、それが進められてほとんど完成しているわけでございます。それからもうひとつは都心臨海部の開発といことでございます。これは今でいうMM地区*でございます。それから新港埠頭ですね。この二つの開発がどうしても必要だと。といいますのは旧市街地の中で伊勢佐木町、元町、中華街。それと横浜西口とですね、まあ、これがやはり一体化することによってですね、対都市間競争の中に勝てる商店街になるだろうと、こういことございまして、その中間の、この新港地区、それからMM地区もですね、やはり業務地域として開発する。但し、その理念はですね、東京へ働きに行く人がですね、多くて、横浜の昼夜間人口の差がですね、38万人の差がありました。昼間になると38万人が減ってしまうんですね、横浜の人口は。土、日はちょっと違いますが、普通のウィークデーはだいぶ減ってしまう。その半分の19万人をこのMM地区で復活させよう、人数を生もうと、こういことで計画をしました。それもほとんど今、だいぶMM地区も出来上がってきているわけですね。それから土地の、もうひとつの土地は金沢のですね、埋立地。これは幸浦(さちうら)、福浦*というところですね。これはハ地区(はちく)までは、イロ、ハまでは埋立が済んでまして、丁度飛鳥田*市政のときでございますので、今度この金沢の埋立地が計画により乗りました。

それは何故かといいますと、市内にあります問屋さんとかですね、小さい工場はですね、車を置いて道路で積み下ろしをする。そこで、将来モータリゼーションの時代になるいことを想定してですね、街の中をもっと機能的にですね、活用できるようにしよういことで、そういうものの移転先を埋立地に求めたと、こういことございまして、まあ、現在運送業とか卸売業とか、私どもの会社もそこに出ているんですけども、そういう計画がそのときになされていると、こういことです。

それから交通関係ではですね、高速鉄道という名前でございますけれども、決して高速鉄道ではないんですけども、地下鉄ですね、これ、四路線を計画したわけございまして、今、二路線だけはできているわけでございます。それから環状道路ですね。横浜に、環状道路をやはり作るいことで、今、2号線、4号線が作られておりますけれども、それももう少しで完成するわけでございます。それからもうひとつは、臨海部のですね、輸送の円滑化を図ろうと、こういことございまして、これはベイブリッジですね。この六つの計画をですね、まあ、昭和40年代になりまして計画を立てたと。それが現在、皆さんの、横浜市民の役にたっていると。横浜はですね、この六大事業がもしなかったら、大変混雑をしてるでしょうし、今の繁栄はなかったように私は思います。この六大事業は大変大事な、私はひとつの街づくりの節目といぐらいに考えておりますし、また、他の都市の手本になっている計画であつたという。先日亡くなられました田村*さんがこの六つの、基本的な計画をしたわけでございますが、それが実行されて現在にあると、こういことございまして。それをちょっと頭に入れて、次の話題に進んでいただくとありがたいと思います。

***港北ニュータウン**
横浜市都筑区茅ヶ崎を中心とするニュータウン。
都市農業を確立して都市と農業の調和を保つ市街地の形成を目指して計画された。

***MM地区**
みなとみらい地区の略称。所在地は横浜市西区の沿岸部。

***幸浦、福浦**
横浜市金沢区にある町名。幸浦は1977(昭和52)年の富岡地区埋立、福浦は。1980(昭和55)年の柴町地区埋立に伴い新設した町。幸浦と対にして「幸福」となるよう願って名付けた。

***飛鳥田一雄**
(1915~1990)
1963(昭和38)年、横浜市長に当選、以来1978(昭和53)年まで4期15年間革新市政をしいた。

***田村明**
(1926~2010)
元横浜市技監。都市政策プランナー。1968(昭和43)年に請われて横浜市庁入りし、企画調整局長として横浜市六大事業を推進。のちに横浜市技監を経て法政大学教授を務めた。

系統 番号	区	間	料 程	摘 要
①	六角橋	 六角橋	18.941	⑥ ⑬ ⑧ ⑭ (平日の午前ラッシュのみの運転) ⑧ (循環運転)
②	生 麦	 桜一丁目	10.390	
③	生 麦	 山元町	9.570	
④	富士ヶ谷橋	 桜一丁目	7.910	
⑤	洪福寺前	 間 門	10.002	
⑥	草名橋	 杉 田 <small>(坂本町)</small>	15.843	
⑦	中央市場	 八幡橋	9.136	
⑧	杉 田	 草名橋 <small>(坂本町)</small>	15.843	
⑨	六角橋	 浦舟町	8.225	
⑩	桜木町駅前	 弘明寺	5.124	
⑪	六角橋	 草名橋	14.128	⑧ (循環運転)
⑫	六角橋	 六角橋	18.941	
⑬	桜木町駅前	 杉 田	9.653	
⑭	屏風ヶ浦	 屏風ヶ浦	15.978	
⑮	屏風ヶ浦	 屏風ヶ浦	15.978	



横浜市  交通局



昭和35年当時の運転系統図

最盛期の運転系統図(1960(昭和35)年当時、横浜市市電保存館ホームページより)

市電の思い出

○司会: ありがとうございます。横浜の街づくりのお話を少ししていただきました。今も高速鉄道という中でお話が出ていましたが、市営地下鉄が開通するまで、横浜には市電が走っておりました。市電に乗ったことあるという方、手を挙げていただいてもいいですか。たくさんいらっしゃるかなと。残念ながら私はないんですけれども。ちょっとこれから市電についての思い出を話そうかなと思います。まず映っておりますのは路線図(51 頁参照)ですね。

ちょっと細かくて見づらいんですが、たくさん市電が走っていたことはこちらからもわかります。野毛は丁度真ん中辺りでしょうか。ちょっと小っちゃいですね、すいません。では、市電について寄せられたエピソードを紹介します。

「野毛には市電が走っていた。どこかへ出かけるのはほとんど市電だった。市電では 25 円で野毛から杉田まで行けた。よく海水浴に行



桜木町駅（昭和三十二年）
（広瀬始親氏撮影寄贈・横浜開港資料館所蔵）

った。電車は桜木町*までしかなかった。杉田や蒔田に行くには市電に乗らなければ行けなかった。」「市電の線路は途切れているところがあった。川沿いに露店が替わったためらしい。桜木町駅前に市電が集まり、不夜城のようだった。」「市電は交通渋滞の元凶のようにみられ、全国各地で路面電車が次々に廃止されていった。横浜でも昭和 47 年 3 月 31 日で遂に全廃されてしまった。同じくこの年、市営地下鉄伊勢佐木長者町駅から上大岡間が開通した。」というエピソードが寄せられています。乗っていた方がたくさんいらっしゃったので、会場の方からも市電にまつわるエピソード、ここに出かけたことがあるとか、思い出話がいただけたらなと思いますが、どなたかエピソードを御紹介いただけますか。では、あちらの方、どうぞ。

○男性: お話のように市電は正に生活の基盤、基本でして、お風呂に行くにもですね、子安まで電車に乗って行ったとか、杉田にパンを買いに行くんで乗ったとか、とにかく生活の中心は市電そのものでした。今のお話、桜木町が中心の地ですから、そういう意味ではそこへ人が集まってくるんで、米軍に、何ていうんですか、消毒をするんですね。DDT*をかけられたとかという、まあ、そんな思い出があります。以上です。

○男性: あ、市電は確かにいろんな意味で市民の足だったと思います。私が覚えているのは近所に市の交通局に勤めていた人がいたので、こういうことを覚えているんですけど、朝、4 時半か 5 時頃になると乗務員を迎えるために市電が来るんですね。特に警笛を鳴らすんです。で、私は住んでるところは藤棚の近くだったんですけど、4 番の市電が通っていて、4 番っていうのは三溪園の方まで行く路線だったんですけど、保土ケ谷駅から。そうするとそれが、こう、警笛を鳴らすとですね、職員がみんなそれに乗りこんで、で、職場に行くっていうんで、何でそんなに早くから来るのかなと思って、今でも 4 時か 4 時半頃になるとよく鳴ってたのを覚えています。

あと、市電っていうのは私達子どものときに遊びに使ったことを覚えてるんですね。我々の小さいときにあんまり、戦後ですけど遊ぶものがなかったんで。ただで乗った

*桜木町

初代横浜駅の改称によって桜木町駅となった。桜木町駅は国鉄と市電の発祥の地でもある。

*DDT

かつて使用された有機塩素系の殺虫剤のひとつ。現在の日本では環境汚染防止のため使用禁止となっている。衛生状態の悪い戦後に、シラミなどの防疫のために用いられた。

ことはないんですけどね。一時、循環線ができたことがあったんですね。何系統だか忘れましたが、生麦からずうーつと来まして保土ヶ谷を通って、で、弘明寺へ行って、弘明寺から伊勢佐木町のところを通って生麦の方へ帰って、1番とかっていう系統だったと思うんですけど、それ、1回ぐるっと回ってきても確か私のときには、さっき誰かが言ってたように25円かよりもっと安いときだったんで、10円か13円とかってときだったと思うんですけど、友達と一緒にいくところがないから乗るとか、うちの祖母なんかは私が子どものとき、これは戦前ですけど、泣いてしょうがないから市電に乗ってですね、一回りしてくるんだって言ってましたけれど、今考えれば悠長な時代なんですけども、非常に市電がなくなったのは今でも残念に思ってます。

確かにモータリゼーションによって、ものすごく車が増えて渋滞になりました。私が唯一覚えているのは昭和28年、27年だったと思うんですけども、高島町の交差点っていうのはすごい長い線だったんですね。ものすごい車の渋滞がありまして、あそこから桜木町まで行くのに非常に時間がかかる。で、市電はまあ、優先的に軌道を走れるわけですが、周りに自動車がいるわけですね。で、私が勘定したことがあるんですけど、何でそんなことをしたかという、中学校のときだったと思うんですけど、

ある先生が転勤をしまして、その先生に手紙を出すときに交通渋滞の話を書いてあげようかなと思って、280台だったと思います、280何台。昭和28年頃ですから、今、考えられないと思うんですけど、ものすごい大渋滞があって、その後だんだんとですね、なくなって私も結構写真なんかも撮っていたのも思い出があるので、持ってたという記憶があります。

○女性：私は今、南区の八幡町というところに住んでおりまして、もう、すぐ中区との区界で、昔は中区の一部だったそうなんですけれども、市電が走っておりまして、私、昭和31年生まれなんですけど、よく昔はやっぱりあの、小さい私達子どもに母が、市電の通る道を電車で、よく子どもの言葉として「遊びに行っても電車を越えちゃだめだよって」、よく言うんですね。で、あそこを私達、小っちゃい子ども同士で渡ろうとすると、もう31年のあとですから、やっぱり交通渋滞で市電のほかに車とか来てて危ないっていう意味だったと思うんですけども、一応そんな感じで言われてまして、で、親と一緒に連れてってもらって乗ったこともありますし、だんだん自分でも乗れるようになって、丁度高校に入った年が市電の終わりの年だったんですね。で、中学のときまでは友達と乗ったりもしたんですが、あの、私は市電が好きだったもので、高校が弘明寺の方でしたので、毎日乗って通えるなと楽しみにしてましたら、3月に花電車*か何かで終わってしまい、すごくがっかりしたという記憶があります。以上です。

○司会：ありがとうございます。では、そちらの女性の方からまず、お話をお願いします。

市電の運賃(大人)

市電は1972(昭和47)年3月31日で廃止となった

大正10年4月1日	7銭	昭和22年9月1日	2円
大正15年4月1日	6銭	昭和23年6月1日	3円50銭
昭和4年10月1日	7銭	昭和23年8月1日	6円
昭和18年5月10日	10銭	昭和24年6月5日	8円
昭和21年2月1日	20銭	昭和26年12月25日	10円
昭和21年6月1日	30銭	昭和28年5月1日	13円
昭和22年2月20日	40銭	昭和37年5月1日	15円
昭和22年6月19日	1円	昭和41年4月18日	20円



*花電車 (横浜市史資料室提供)

多くの慶行事のときに走り、装飾を施して運行された。見るもので乗ることはできなかった。この写真は、市電が廃止となる1972(昭和47)年に撮影。

○女性：私も子どもの頃、市電であちこち行ったりくちなんですけど、皆様のお話と重なるところが多いです。あの、市電だと軌道がありますので、どこで曲がるとか、何番がどういうふうに行くってのが子どもでもわかるんですね。ですからどこで乗り換えたらいいとか。で、親も子どもだけで出してくれるという、そういう利点がありました。えー、それから、さっきの市電の系統図を見ますと、だいたい横浜の範囲っていうのが市電のあるところっていうイメージなんです。えーと、それから、自動車や何かが多くなってっていうお話がありましたけれども、あのお、本当に市電の軌道に車が入って市電がほとんど動けないっていう状況も経験してます。で、その点、今の『コクリコ坂から』*なんぞというのを見ますと、とてもお行儀よく走ってますので、あれはちょっとあの時代にはなかったなって思いました、はい。

*『コクリコ坂から』
2011(平成 23)年に公開されたスタジオジブリによるアニメ映画。
1963(昭和 38)年の横浜が舞台。

それから、後ですね、小港の方のところを走りますと、丁度先ほどの一番初めの話、接收の話、ありましたけど、今、沖縄に行きますと両側がフェンスになってますけども、あのイメージでした。あと、市電が終わるときに花電車をやっぱり経験して、それから終わるときもそうですけど、始まるときに、保土ケ谷の方を通るときに何か花電車、通ったなあって、かすかな記憶があります。最後に、あちこちに今でも市電の敷石が残って利用されてますので、そういうのを見かけると、ああ、懐かしいなあっていうのを、いつでも思います。以上です。

○男性：えーと、私は港中学に通ってたときに、本当は仲尾台に行かなきゃいけないんですけど、越境入学してまして、上野町から吉浜町まで歩いて行ってたんですけど、やっぱりモータリゼーションで市電の方が遅いんですよね。こっちのが歩いてって着いちゃうくらいで。一度だけ元町のトンネル、赤レンガで出来てたんですけど、陸上部に入っていて、その帰りにですね、元町側から何かちょっと冗談半分で友達と話してて、麦田までトンネルの中へ入ってみようかと。で、二人でトンネルの中へ入ってっちゃったんですよ。で、中は凄く、レールのところはもう上からの、何ていうんですかね、沁みるっていうか、ポタポタと落っこって、ぐじゃぐじゃなんですよ、レールのところが。それとあと、コウモリが中にいたんですよ、暗いから。

まあ、200メートルぐらいのトンネルなんですけど、そこをもうとにかく必死で走って、市電が来ないようにね。何とか麦田まで出たときには市電が来なかったのですね、怒られなくてすんだんですけどね、まあ、そんなことがありました。それと陸上部のときに帰りがけに、かなり大雪が降ったとき、吉浜橋のところで、市電が通ったときに反対側から互いに雪合戦をした覚えがありますね。で、何か今、コクリコ坂、言っていましたけど、西の橋っていう駅はないんですよ、電停がね。あれ、ちょっと僕も見えないんですけど、何かあれはちょっと違うなと。(会場から笑い) そういう歴史的なところから見ちゃうとだめなんですよ。だからそういう目で見ないようにしてもらった方がいいかも知れません。



*麦田トンネル(絵葉書『横浜山手桜道 (電車ノトンネル)』より)
(発行年不明)(横浜市中央図書館所蔵) 元町から桜道下(現在の麦田)をつなぐ全長約 260m(貫通当時)のトンネル。市電にとってはじめてのトンネル工事であり、1910(明治 43)年 11 月に開始された。貫通させたときの工事関係者の喜びようは、大変なものだったという。

○男性：皆さんのお話よりちょっと前になりますが、戦争中の横浜の市電ですが、まず、車庫がですね生麦*と、それから、あそこは何て言いましたかな、杉田の方へ行く途中、滝頭*ですか。それから麦田*と、車庫は三つきりしかなかったんですね。で、生麦の車庫はですね、市電の番号でいくと1番、2番、3番なんです。そして4番と5番が麦田の車庫。そして6番から9番まで、戦争中なんかは確か9番までしかなかったんですけど、それは滝頭の車庫ということで、麦田の車庫が一番小さかったんです。で、私はその頃は西平沼というところ、扇だとか、そこら辺から通っていたんですけどですね、その当時は三中っていいました。今は緑ヶ丘ですが、そこへ通ってたんですけども、市電はすごくのろいという、さっきの話、のろいんです。何故かっていいますとですね、運転席の出力レバーは、直列か並列かというところに最初に持ってきてまして、それからグッと手前に引くとモーターがガッと、早く回るようになってるんです。ところがですね、電気を使うからというんです、その最初のところまでいって、もう下に支え棒が出来ちゃってですね、進めないんですよ。ですからスピードがとてもものろいんです。そうしますとお話のようにですね、扇田町から乗ろうとしてもですね、行っちゃいますと、すつとんで駆けていきますと次の駅でちゃんと、停留所で間に合うんですね。それほど市電はのろかったんです、戦争中は。

で、先ほど高島町ってお話ありましたが、高島町が一番賑やかだった交差点として大変だったのは1番、2番、3番、4番、5番、6番、これと7番も通ってました。そこをその線路が全部、四つ角じゃなくてまた斜めにも来るというかたちで、ものすごく複雑だったんです。ですから信号が1回、こう、終わりますと次に来るまで随分時間がありましてねその間イライラして待ってました。そんなような記憶がありますね。まだたくさんありますが、一応このくらいにしておきますけども。

○男性：今のお話の続きみたいになりますけど、ちょっと高島町の交差点が何か複雑だったらしいんですけど、そこにですね、電信柱みたいな柱が立ってて、その上に何か部屋がありましたよね。で、そこで何か監視をしているらしくて、信号か何かの切替があったんですね。一種の小屋なんですよ。ガラス張りで、何ていうんだろうなあ、灯台みたいな感じのものがあってね、そこで信号の切替か何かをやったようなこと、今、話を聞いて思い出しました。それから、私は弘明寺の商工高校に通ってたんですが、本牧の千代崎町から通って、尾上町で乗り換えて弘明寺までの終点まで毎日、通ってたんですが、生徒の時代は定期で通ってましたから別に不自由はなかったんですけど、戦前は確か乗換切符*ってのをくれたと思うんですね。それで、例えば千代崎町から尾上町で乗り換えて弘明寺へ行くのであれば、何か細長い、鉄を入れたか入れないかよく覚えてないんですけども。すごく小さい子どもの頃ですけど乗換切符って、こんな細長いのをもらって、それを見せるとその次の路線に行かれたように思いますんで、一回料金を払うとずっとどこまでも行けちゃうんじゃないかなと、はっきりした記憶じゃないけど、それはあります。

***生麦車庫**
横浜市鶴見区。
1928(昭和3)年に完成。これにより高島町にあった車庫は生麦に移転した。

***滝頭車庫**
横浜市磯子区。
1912(明治45)年に完成。最大の車庫で工場も併設していた。最後に廃止された車庫で、現在はバスの車庫になっており、一角に市電保存館が立地する。

***麦田車庫**
横浜市中区。
1928(昭和3)年に車庫が完成。1970(昭和45)年に廃止された。



*昭和3年の電車乗換券をデザインに取り入れた記念乗車券(地図式) (横浜市電保存館提供) 料金が均一性、乗り換えなしになる前の切符は、停留所名がずらりと記載されている「駅名式」と、路線が地図のように書かれている「地図式」などの形をしていた。当時の車掌は、切符を裏返しにしておいて、駅名に裏からパンチを入れ、表の地図の目的停留所に穴をあけられるという”名人芸”を競ったという。なお地図式は昭和17年で廃止された。

それから、千代崎町で麦田の、先ほどお話が出た麦田のトンネルを越えて行きますと元町の西の橋っていうんですかね、あれは、橋がありまして、そこからずうーっと吉浜橋、花園橋、えー、横浜市役所の前からずうーっとまっすぐ行くわけなんですけど、今の根岸線がありませんから、根岸線の下が川だったわけで、その川の向こう側にです、ね、晴れた日ですと、特に冬なんかは富士山が真正面に見えるんですね。で、素晴らしい風景なんですけど、今、あれは全然見られませんし、ビルがたくさん建っちゃいましたから、えー、根岸線に乗っててもほとんど富士山を見ることは出来なくなっちゃったと思いますが、私はもう毎日、富士山を見て通ってた時代を思い出しました。

それからもうひとつ、その市電で面白いのはボギー車*っていですね、四つの輪っぱの付いたところに、あの、市電のボディーが乗っかってるのが前と後ろにあるやつを、それをボギー車って、確か言ってましたけれども、それは割合安定して走りますけれども、もっと短い電車はですね、車が四つしかなかったような感じがして、こういうふうに揺れるんですね。もう揺れて揺れてしょうがないように揺れるんですが、それで長く通ってたせいかですね、ちょっと気分の悪いときでも、その市電に乗っちゃうと、すっかり気分が良くなっちゃって、平和な、そういう経験がありますし、そのあとですね、学校で大島へ修学旅行に行ったことがあるんです。で、東京の栈橋から船に乗って行って、三十何人か同級生と一緒に乗ったんですけれども、そのとき海が荒れたのか何かよく覚えてませんけど、船酔いしなかったのは私ともう一人、二人しかいなかったんです。で、それ、よくよく考えてみると徒歩通学してた人は皆、酔っちゃったんです。(会場から笑い)ところが私は普段、毎日その市電のこの揺れに、こう、体が順応してたのか、(会場から笑い)全然酔わないで旅先でびっくりした。私もひょろひょろしてましたから、よくお前は酔わないなあなんて言われたのを思い出しました。

○司会：ありがとうございます。市電の思わぬ効果が。じゃあ、後ろの、今の方の二列後ろの。お願いします。

○女性：はい、失礼します。通学の話が出てきましたんで、ちょっと今まで区名があまり出ませんでしたけど、私、神奈川区に住んでまして六角橋から11番に乗って中学時代、大和町まで通ったんですね。で、そのあと、そこからずうーっと学校の丘からぐるっと回って、で、11番のあの辺の間門とか、その辺からまた乗って帰れたんですね。えー、実は今でも車で通りますが、その当時は関内牧場*って言われてまして、本当に戦争の痕がそのまんま残っている。そして、学校の丘から行きますとYCAC*から、要するに外国人の、兵隊さんのすてきなハウスが並んでるところへ、不思議に入れたんですね。まあ、今はとてもMP*さんがいてだめですけども、そしてちょっとそこにいる子ども達と、中学生ですので英会話

*ボギー車

路面電車は誕生当初は全長8mほどの車体の4輪車(単車)でスタートしたが、乗客の増加に対応するため、車体を長くする必要があった。しかし単車ではカーブを曲がりきれず、きしみを生じた。

そこで前後2組の4輪の台車の上に車体を乗せ、車体と台車が相互の位置を回転できスムーズに曲がることのできるボギー車が開発された。初のボギー車は昭和3年製造で、全長13.4mだった。

*関内牧場

1945(昭和20)年の横浜大空襲で関内は、県庁、横浜正銀などの建物を残して一面焼け野原となった。そこに米軍が進駐、接收した。1952(昭和27)年接收解除が進んだが、関内の復興は遅れ、一面に雑草が生い茂った様から、こう呼ばれた。

*YCAC

会員制クリケットクラブが前身。横浜カントリー・アンド・アスレティック・クラブの略称。ラグビーの日本での発祥となる1901(明治34)年の慶応大学との対戦を行ったほか、野球も日本国内に伝えた。

*MP

Military Policeの略。アメリカ陸軍の憲兵。



写真上：接收中の関内の一部、写真下：接收解除直後(『横浜の接收と財政』1953年刊より)

の真似事をして、そして山を下りて三溪園のあの近辺からまた、定期ですから乗って帰ると。その代わりに今は市営バスを、何ですかシニアパスをもらえるようになって、まだもらえるっていうよりは少し前なので自分でまだお金を出していますが、市営バスなら1か月3000円でどこでも乗っていいというので、昔そういう市電に乗った記憶を辿りながらあちこち、ちょっと遊んでられます。あー、でも、その中学時代の思い出っていうのがすごく横浜の復興と重なって、その後の大発展に繋がってるっていうので、この取組もそういう意味ではすごく、何かこういうのを記録に残すと横浜の庶民史みたいなものが積み重なるかなあと思って、楽しみにしております。以上です。

○男性：市電の思い出はですね、私住まいが、実家が三吉橋なんです。で、現在私は横須賀なんですけど、一番の市電の思い出っていうのは、あのお、屏風ヶ浦*っていうんですか、あれから先が満潮になるとね、もう線路まで水が来ちゃうんですよね。あれが一番印象に残ってますねえ。それから、昭和20年か21年ですか、とにかく焼け野原でもって風呂もないし、で、おふくろと弘明寺まで風呂に入りに行っていたことがありましたね、市電に乗かって。弘明寺と、それから横浜駅*の東口。あれ、何のビルだったか、ビルにやはり銭湯がありまして、それが非常に印象に残ってますねえ。ですから僕、小学校の当時3年ですけど、やっぱりおふくろと同じ女湯に入ったんですね、小学校3年で。そんな思い出があります。それから、これ、話はあれですけど、森さん、(会場から笑い)横浜高校ですか。私、横中です。それで、小林さんね、先ほど博覧会の件ですけど、野毛と、それから反町でやりましたね。

というのはですね、僕は小学校が三吉小学校*だったんです、浦舟町の。で、そこで疎開しまして、帰ってきたのが南吉田小学校なんです。三吉小学校がもうなくなっちゃって。そんであの、中学へ入ったときに、横中に。

試験が出たんですよ、たまたま今、横浜で博覧会しているけど、どことどこなのかと。で、もうさあ一つと手を挙げて。それからもうひとつ覚えているのは光と音とどっちが速いかって問題で、僕は光ですって。そしたら、そうか、本当かななんて言うから、いや、音ですって。まあ、結局光なんですけど、で、そのとき覚えたのが光が1秒間に地球七回り半ですか。で、音というのは1時間でもってこの辺から下関までがほしい1時間ぐらいらしいんですね。そんなようなことを覚えております。

それからですね、あと、いろいろもう、私も横浜で勿論生まれて、おじいちゃんから横浜なんです。ですからいろいろ思い出がありまして、もう戦後、何てったってマッカーサーが来てがらっと変わったように、まあ、とにかく見るも聞くもびっくりびっくりでもって、まずもう、ダンプカーだとかね、それからもうとにかく機銃車とか、いろいろなもう、何てったってもうアメリカ、アメリカでもって、ですから僕なんかは「ギブミー チョコレート」の時代です。それでもう、いろいろあるんですけど、年代からいったら昭和26年ぐらいですかね。これは今の英国のエリザベス女王*ですね。あの人の戴冠式というのがありまして、で、今の天皇陛下が皇太子の時分に横浜から船で行った

*屏風ヶ浦

横浜市磯子区。屏風ヶ浦の市電停留所は、道路の縁が海岸だった。



*横浜駅(三代目)(絵葉書『Yokohama, Station. (大横浜名所) 横浜駅の美観』より)(横浜市中心図書館所蔵)
現在の地に開業したのは1928(昭和3)年。三代目の横浜駅にあたる。初代の横浜駅は現在の桜木町駅、二代目は高島町駅の場所にあった。

*三吉小学校

(16頁「市大の医学部のそばにある学校」参照)

*エリザベス女王

(1926～)
ここではエリザベス2世を指す。(在位:1952(昭和27)年～)。イギリスの女王。

んですよね。船の何だかというのをちょっと僕、覚えてないんですけど、それでその皇太子が乗ってきた車というのが、おそらくロールスロイスじゃなかったかと思うんですけど、運転席と後ろと遮断されてまして、全部ボタンなんですね、右へ回れだとか左だとか、ゆっくりだとか早くだとか、どうのこうのだからって、それが何か非常に印象に残ってまして、で、それをずうーっと見てて。で、今思うと不思議なんですけど、よくあんなのを我々が自由にそばまで行って見れたなあと思うんですけど、まあ、時代が時代なんですかねえ。そんなような思い出がありますね。

○男性：あの、今のお話の続きなんですけれども、私も小学生の5年か6年のときですね、今の紅葉坂*ですね。あそこで、学校で皇太子がエリザベス女王の戴冠式に行くので並ばされて、立って送ったことがございます。そのとき一番驚いたのは、車を見た印象はないんですけど、その前に散水車がザーって通っていったので、ああ、こういうことがあるんだって、それがすごく印象に残っております。

*紅葉坂
(地図②B-1)

それと市電の話ですけど、私は17年生まれで、えーと、二十歳(はたち)まで12番の終点の弘明寺に住んでおりました。で、親は藤澤さんと同じで飲食店をやっております。今だに三番目の兄が、継いでやってるんですけど。市電の印象というと12番で行くと宮元町の辺り、ずうーっとかまぼこ兵舎があったってということ。それで、かまぼこ兵舎の払い下げがあったんでしょうかねえ。弘明寺の国大の法学部の前にかまぼこ兵舎が一つだけ残っていたんですよ。そこが図書館になって、私も図書館派です。結構、本を読ませていただきました。えーと、石油ストーブの匂いがすごかったのを覚えております。

あと、戦前ですが、父親の体がちょっと具合悪かったときに麒麟ビールの方の人が何か、市電を使い、今じゃあそんなこと出来ないでしょうけれど、市電を使って何か製品を、弘明寺まで持ってきてくれたってことが。で、市の交通局の方、結構お客さんで来てたんで、それでやっていけたことがあったようですね、ええ。大岡川が氾濫したときもやっぱり市電の12番、弘明寺の終点の方までビヤ樽が転がっていったことがございましたね。そういうことも思い出しました。あと、一番上の姉が結婚して曙町ってところで、中郵便局の向かいのところでやはり飲食店をやっております。そのとき、お酉さん*のお手伝いに行ったことがあるんですよ、酉の日ですね。酉の市ですか。そのときに朝か夜、風呂が何か終夜営業みたいで朝に帰ったんですよ。そのとき切符が何か安かったような、安い値段で乗れたような覚えがちょっと残ってるんですけど、それがちょっと記憶が確かじゃないんですけど。以上です。

*お酉さん
(21頁「お酉様」参照)

○男性：私、団塊の世代で戦前のことは知らないんですけども、昭和30年頃、丁度野毛から山元町に行くのが市電3番が通ってまして、この市電は山坂が多いので、運転席の横に必ず砂袋ってのが置いてあって、で、雪なんか降ったときに坂、登れないんですね、滑っちゃって。で、その車掌が砂袋から砂を出して市電の前に撒きながら登っていくと。そういうことを、ほかの電車はよく知らないんですけど、3番の電車は、よく。山元町のところ、もう、すごい坂ですからね。

あとねえ、すごく、我々団塊の世代の男の子は多分、こういういたずらをほとんどの人間がしてたんじゃないかなあと、悪ガキの頃なんですけども。市電のね、線路の上にね、釘を置くんですよ。(会場から笑い) これ、多分ね、ほとんどの人がやってたんじゃないかと思うんですよ。釘を置いてね、路地に隠れているんですよ。市電が、そのね、ガタエンと通るとね、釘がぺっちゃんこになってね、それをこう、弓

矢の先に使うんですよ。それがね、変に置くと曲がっちゃうんですよ。まっすぐ置かないと曲がっちゃうんです。だんだんだんだんエスカレートしてね、あの、石とか置いたりするんですよ。（会場から笑い）そうするとね、それ、発見されて電車が止まっちゃうんですよ。そうするとね、急いで逃げてね。（会場から笑い）多分、団塊の世代の男の、ガキ、悪ガキ、多分同じような経験、してたんじゃないかなって気がします。

○森：やりましたやりました。（笑）（会場から笑い）あの釘が磁石になるんですよ。それであの、砂鉄を集めたりとかね、みんなやりました。それからあの、癪癪玉を撒いて、車が通るとパパパアーンとかね。そんなことばかりやってましたね。（笑）

○司会：悪ガキトークがありましたが、皆さん、うなずいている方もお見受けしたので、たくさんの方がもしかしてやられたのかも知れないですねえ。ほかに何かお話しになりたいという方、いらっしゃいますか。では、真ん中の方から先にお願いします。

○男性：地下鉄の話になるんですけれども、えー、昭和47年に上大岡と伊勢佐木長者町間で営業を開始したわけなんですけれども、現在では例えば上永谷には地上の基地があります。この最初、開業した当時の上大岡と伊勢佐木長者町の間には地上の基地はありません。で、じゃあこの、漫才みたいな話ですけれども、その車両はどこから入れたんだ。（会場から笑い）これ、ちょっと疑問で私、ちょっと調べたんで知ってるんですけど、それは内緒にしといて、どうやって車両を入れたか御存知の方、いらっしゃいますでしょうか。

○司会：どうでしょうか、御存知の方、手を挙げていただけますか。あつ、お一人。

○男性：あれ、どこから入れてるかということですか。

○男性：そうです。

○男性：あれ、上永谷じゃないですか。

○男性：いえ、上永谷までは地下鉄の駅は行ってません。上大岡まででしか。

○男性：上大岡までのときですね。それは知りません。

○男性：その前のことをいただきたいと。

○小林：私の記憶では確か弘明寺の辺だったと思うんですけど。地上から入れたと。

○男性：実はその、蒔田の駅の西に杉山神社ってのがございます。そのこの歩道に、その時にここから入れたんだっていう記録が書かれております。何でもそのところを上から掘りまして、で、車両をトラックで積んできて、あそこから吊るして車両を。もう線路が敷いてありますから、そこへ乗せて、それで蓋をしちゃったと。で、当時4両*だけを入れて、それで行ったり来たりしてるのが、これが最初だったそうです。丁度私もいろいろな方に聞くんですけども、知らない方が多かったので、誰か知っていच्छやる方、いるかなあと思って、ちょっとお話をしました。

○司会：ありがとうございます。地下鉄が始まったときの秘話でしたでしょうか。では、一番前の方、お願いします。

○男性：先ほどから戴冠式*のお話が出ていましたけれど、船の名前はプレジデント・ウィルソンかプレジデント・クリーブランドだったと思いますんで、その頃はもう、船が盛んな時期でした。で、よく港に見に行った記憶がございます。それとあと、市電の件ですけど、えーと、小学校の低学年のときに遠足、春の遠足がありまして、その帰りに丁度、桜木町の前に止まって、通ったときに桜木町事件*の黒焦げの国電を見た記憶があります。小学校低学年でしたね。それから後は、まあ、先ほど釘の話も出ましたが、まあ、それ、私が言う前に言われて（笑）、そんな記憶がございます。まあ、勿論その辺

*4両

発言では4両とあるが、初めての横浜の地下鉄は3両編成であった。1971(昭和46)年3月16日に、地下鉄車両が2台のクレーンで、地下に吊り入れられた。深夜にもかかわらず、工事現場には100人以上の市民が集まったとされる。

*戴冠式への皇太子出席

1953(昭和28)年3月30日、プレジデント・ウィルソン号で横浜港を出航。同年10月12日帰国。

*桜木町事件

1951(昭和26)年4月24日に国鉄桜木町駅構内で発生。電車の1・2両目が炎上して106名が焼死した。

り、例えば 10 円玉とか 1 円玉なんてやった記憶もあると思うんですけど、まあ、そんな遊びが、遊びっていうか、まあ、悪さがありました。

それから、まあ、今、市電が全くなくなってしまいましたけど、何とかやっぱり横浜に一路線くらい観光用の、よく、まあ、富山とか、ああいうところで非常に盛んに動いているような一路線、あったらいいなと。今、私なんか思ってるのは今まで走っていたところの例えば 3 番系統、ああ、3 番かな。あの山元町へ行く電車、あれ、3 番でしたっけ。そうですね、あの路線なんかは坂もあって、山手の丘の方に経由して歩いて行けるような、あれがありますんで、非常にこれを期待しているところです。

○森：今お話しにあった釘の方もやりました。それで、やんちゃな奴は京浜急行でやったのがいまして、あれだとすごくぺっちゃんこになるんですね。車両の数でしょうか。ただ、飛ばされちゃうんですね。で、それを探すのが大変で、探しているうちに次の京浜急行が来ちゃうんで、非常に危険なことをやっておりました。(会場から笑い) 今、京浜急行の関係者の方まさか、いないといいんですが。(会場から大笑い) えーと、市電はガキ大将が指図していて、曲がり角でやると脱線するかも知れないのでやめろというような指示が出ていました。本当に脱線するかどうかはわかんないんですけど。それを細い笹にひもで結わいて弓矢にして。お金のいる子はピストル持ってるんで、西部劇やって、お金のない貧乏人の子はその弓矢でアパッチの方をやりまして、それで、暗黙のうちに顔から上は狙うなっていうことになってんですがね、うっかりすると飛んできて刺さるんですよ。それで太ももに刺さった友達のを僕が引っこ抜いたんですけど、笹の方だけ抜けちゃって、釘が深く刺さって、これが取れなくて、えらいことになったことがある。

それから、この路線図(51 頁参照)で左上の方の横浜国大がございます、「文」って書いてあるところですね。あそこの下の前里町四丁目の、そばに住んでおりましたから、割にどこでも行けるんで、先ほどの乗り継ぎでもって杉田の辺まで行きまして、春先ですね、潮干狩りでバケツ持って乗って行って、あそこは漁業権がありますんで、バケツに 1 杯獲っちゃうと 30 円ぐらい取られちゃうんですけど、子どもですとお目こぼしがあって、楽しいからいっぱい獲んですが、上がるときにまた撒いてきて、バケツに三分の一ぐらいにしてですね、監視のおじさん、いい人を知ってますから、そこの人だとお金取らないんですね、子どもは。それで往復、先ほど 13 円という値段があったんですが、確かこのくらい。子ども料金だったんでしょうか。それから往復乗車券を買うと確か 1 円安くなった記憶があって、それで杉田から前里町四丁目まで帰って来ました。

もうちょっとエピソード言いますと、あそこ直角に曲がっていますけれども、すごい急カーブでして、あそこは天皇陛下が葉山の御用邸に行かれる時に必ずあそこを通るんですね。それを子どもの情報で何で知ったのかはわかんないんですけど、毎年あそこで捕虫網(ほちゅうあみ)を持った少年達、半ズボンの私達が天皇陛下の来るのを待ってた記憶があります。天皇陛下の乗った車も 90 度曲がりますので、あそこでスローダウンするんですね。そのときに天皇陛下は毎年、子ども達がそこで迎えているのを知ってまして、窓が開きましてね、縁なしのメガネがきらっと光って、まあ、戦後生まれなんですけど、恐れ多いというあれはなんですけど、何か直立不動になりまして、天皇陛下は確かほほえんだ。昭和天皇ですね、ほほえんだ記憶が前里町四丁目にはあります。

それからこれ、昭和 35 年の路線図で全盛期だと思うんで、一番多かった頃のじゃないかと思うんですが、これ見て認識したのは「私の横浜」ってこの範囲だったんだなあという。で、市電には、お小遣い 10 円あるかないかの頃ですから、なかなか乗れなくて、このエリアをほとん

ど歩いていたような記憶があります。よほどお金がないと子どもは乗らなかったですね。潮干狩りはさすがに遠いですからね、乗ったと思いますけども、以上でございます。

○司会：ありがとうございます。市電の写真をたくさんいただいていますので、少し皆さんにもご覧いただければと思います。(市民の皆様からの提供写真 27～29、39、65～81 映写)

○森：それから、このことがあるからじゃなくて一昨日、実は滝頭の市電保存館*に行ってきましたら、懐かしい市電が並んでおりましたけど、私の頃はブザーではなくて車掌が紐を引っ張って「チンチン」って、あの、運転手に鳴らせて知らせてましたね、発車のね。あれがないんでがっかりして、全部ブザーになってましたんで、えーと、投書でもしてやろう、1台そういうのを作れと。(会場から笑い) いわゆるチンチン電車の語源になった、その設備がなくて、全部ブザーでした。それからワンマンになってましてね、非常に残念に思いました。

○司会：ありがとうございました。では、写真をどうぞご覧ください。(市民の皆様からの提供写真 72～74 映写)根岸湾が奥に見えるようですね。こちらは下ぎりぎりに市電が見えますが、奥が磯子駅だそうです。(写真 79～81 映写)右上に見えてる車両が根岸線の車両で、市電は真ん中の木の陰に見えるものですね。こちらは芦名橋で折り返している様子が写真に撮られているものです。これは待機中です。

○小林：この頃のパンタグラフはですね、受電装置*、屋根に付いてますね、パンタグラフ、ああいう具合になってますけれども、その昔は一本の棒だけだったんですね。それで先の方に車が付いてまして、それで受電をしてたんですね。よく交差点で曲がる時にですね、それが外れちゃうんですね。そうしますと車掌さんが、後ろの窓を開けて乗り出してですね、それをこう直すんですが、なかなかそれが決まらないときがあるんですね。そうすると乗ってる人からバカとか早くやれなんていうような声が飛び交うんですけど(笑)、それが面白かったですね。そんな記憶があります。

○司会：車がたくさん横に。先ほどカウントされたという方もいらっしゃいましたが。

○小林：先ほどのお客様の中からお話がありました柱のようなものが一本立って、その上にお家があつてですね、その中で見張ってるというようなお話がありましたが、あれは、右へ行ったり左へ行ったりするときのレールの切替をあの中でやってたんですね。で、私も一回、あの中を見せていただいたことがございまして、えー、そうですね、1メートル20センチぐらいのポールにガチャっと。ガチャンと引っ張るんですね。そうしますと機械式にですね。ですからあそこは年中油をぬってたと思うんですね。で、冬なんかですとちょっと温めてたと、そんなような記憶があります。

○司会：(市民の皆様からの提供写真 69 映写)今、映っているのが杉田線の廃止をお知らせする看板ですね。昭和42年の7月に撮られてます。(写真 39 映写)えーと、これが昭和47年で、もう廃止される年の市電ですね。桜木町の駅前撮られている写真です。このような市電の写真が皆様からたくさん寄せられました。どうもありがとうございます。

横浜スタジアム

○司会：市電のお話で大変盛り上がりまして、そろそろ4時になりました。昭和53年に横浜スタジアム*が完成いたしましたので、そのお話を少しさせていただきたいと思います。横浜スタジアム、今、出ている写真がゲーリックスタジアムの写真ですね。今、出ているのが今のスタジアムです。では、横浜スタジアムについて寄せられたエピソード

*市電保存館

横浜市磯子区滝頭。市営バス滝頭車庫に隣接して立地。1973(昭和48)年開館。

*受電装置

横浜に路面電車が登場した当初は「ツノつき電車」の名の由来ともなった2本のポールが集電装置となっていた。しかしカーブや坂道では架線から外れやすいという欠点があった。戦後、ばねの力で架線に押しつけることで、外れる心配のない「ビューゲル」が考えられ、1949(昭和24)年から採用された。

*横浜スタジアム

1929(昭和4)年に関東大震災復興事業の一環として「横浜公園球場」が竣工。1945(昭和20)年終戦後の駐留軍の接收で「ルー・ゲーリック球場」と命名され、日本初の夜間照明灯が完成する。接收解除後の1955(昭和30)年、球場改修に伴い「横浜公園平和野球場」と改名。1978(昭和53)年日本発の多目的スタジアム「横浜スタジアム」としてオープン。

を少し御紹介します。

「現在の横浜スタジアムは、戦後はゲーリックスタジアム*という名前で、夜になるとアメフトの試合をやっていた。終わり近くになると無料で入れる席があったため、近所の子ども達で席に残った食べ残しの缶詰のピーナッツを集めたりした。」

ほかにも、「横浜スタジアムは前は平和球場って呼んでたけど、球場下には卓球とか遊べる施設があった。区役所もまだなかったから、あの辺り一面、広場でね。5月のみなと祭りにはバザーをやっていた。見世物屋も来ていて、お化け屋敷や食べものの露店、ヨーヨーや鉛筆つかみもあって、とても楽しみにしていた。」というようなエピソードが寄せられています。

皆様の中で平和球場の時代ですとか、何か思い出のあらわれる方、いらっしゃいますか。では、真ん中の辺りの方、お願いします。

○男性：今の横浜スタジアムの前のゲーリック球場で、これはプロ野球ではジャイアンツが大変、横浜では人気があって、最終戦でですね、川上がホームランを打ちまして、青田とともに25本の、同時にホームラン王*というのをゲーリック球場では記憶しています。それから、今の横浜スタジアムでは細郷さん*が横浜市長で、丁度あの頃、市民球団ってことで株をだいぶ上げたと思うんですがね。そういう中で細郷さんが始球式をしたんですが、あの方はスポーツマンですがね、東大でヨット部、ヨット部というか船の関係でですね、ボートの選手だったようですが、それで始球式をしたところが、自分の真ん前に投げて、キャッチャーまで全然球が行かなかったという記憶が。以上でございます。

○男性：昭和24年の話になるんですけども、ここに出ている横浜球場はゲーリック球場というおりましたが、その横浜公園の中にはこれのお隣に野外音楽堂ってのがありました。で、昭和24年に米軍からの食糧の援助があったので、その感謝大会が神奈川県主催で行われたんですが、たまたま私、そこに行く機会があったときにですね、アトラクションとして何かあるということで期待してたんですけども、実はその、ちっちゃな女の子が白いドレス着てパタパタと出てきまして、「東京ブギウギ〜」って唄い出したんですね。これが美空ひばりだったんです。で、その後すぐ、野毛の国際劇場*ってのがありましたね。その舞台に出て、それですぐに今度は浅草の国際劇場っていうように。だけど一番最初の美空ひばりを見たところになるのかと。

○男性：川上がホームランを打ったっていうお話をしたんですが、この写真を見ますとね、夜間照明の塔がないんですよ。確か、ナイター*設備がこの後に出来たのかも知れないんですけども、おそらくナイターは横浜球場がプロ野球で最初じゃないかと思うんですけど、はっきりした確信はありませんけれども、そんな感じをもっておられますけども。

○小林：では、私から。戦時中の話に戻ってちょっと申しわけございません。私の記



*ルー・ゲーリックスタジアム (1951(昭和26)年)
(横浜市史資料室 提供)

***川上、青田のホームラン王争い**
川上哲治と青田昇(ともに巨人)は1948(昭和23)年に激しいホームラン王争いを繰り広げた。シーズン最終戦で川上がホームランを打ち、川上、青田が25本塁打でホームラン王を分け合うこととなる。最終戦はゲーリックスタジアムではなく、川崎球場で行われた。

***細郷道一**
(1915~1990)
1978(昭和53)年に市長就任。依頼3期当選。みなとみらい21計画を推進した。

***野毛の国際劇場**
(地図②B-2)
横浜国際劇場のこと。1947(昭和22)年、現在の日本中央競馬場ウインズ横浜の場所に開場。新国劇、新派、歌謡ショー、演芸などのスターが出演した。1948(昭和23)年に当時10歳の美空ひばりが出演した。

***ナイター**
ゲーリック球場には1946(昭和21)年に日本初の照明灯がとりつけられ、米兵たちがナイターを楽しんだ。日本人が初めて使用したのは1946(昭和21)年9月のハマの早慶戦(横浜高工-横浜高商)。プロ野球史上初のナイターは1948(昭和23)年8月17日の巨人-中日戦であった。

憶では、あそこは捕虜収容所*になってまして、今のグラウンドは畑になっていた記憶がございます。私はそれを見させていただいたことを記憶しております。そんなことをご記憶の方はおられますでしょうか。それともうひとつ、新しい今の球場を作るときでございますけれども、市民から株主を募集*したんですね。で、一口 250 万円ってことで 800 口を皆さんからお金を集めまして、で、それでこれを作って、建物そのものは横浜市に寄附をしましたので、スタジアム、横浜スタジアム株式会社が現在所有をしております。横浜市所有になっております。で、土地は国有地でございます。

○藤澤：スタジアムの公園の中に昔はフライヤージム*っていうかまぼこ型の大きな体育館があって、あそこで室内競技のですね、県大会とか市の大会とかをやっていましたね。それから、今の噴水辺りに大きな教会堂がありましてね、チャペルセンターって。主に米軍の関係の方々の礼拝だとか、それから結婚式だとかをやっていました。で、特に宗派を決めないで誰でも使える。それから日本人の人でもあそこで結婚式を挙げることが出来たんですね。私の友人もあそこで挙げまして。わずか 50 人ぐらいしかいなかったのに、広ーい教会堂で、えらく何かこう、間の悪い結婚式だなあなんて、そんなことを覚えてますね。

○大久保：あのお、私もその公園のそばの教会に、たまたま子どもの頃ですがクリスマスの日の前に行ったことがありまして、米軍の方がきれいに着飾って教会に入るのを、何か映画のワンシーンのように覚えております。

○男性：あの、今のフライヤージムのお話が出たんですけど、あそこに体育館が映ってますよね。あれってフライヤージムじゃないですよ。あのねえ、フライヤージムは今の弘集堂っていう本屋さんがありますよね、伊勢佐木町に、オデオン*のそばに。あそこにあったんですよ。あそこにあって、私が何故記憶しているかという、初めてオーケストラの団、日本人の森正(もりただし)*さんがあそこで指揮をして、あそこで何か音楽会があったんですね。で、中学生のときだったと思うんですけど、みんなその、珍しいからっていうんで行ったことがあって。あそこから多分、そっちへ移ったんだろうと思



横浜市庁舎周辺、フライヤージム、平和球場、山下埠頭
(1959(昭和 34)年)(横浜市史資料室 提供)



*オデオン座(絵ハガキ『(大横浜名所) 伊勢佐木町通り』より(1923-1940)(横浜中央図書館所蔵)左手中ほどにオデオン座が見える。1911(明治 44)年に開業。輸入フィルムを東京より早く公開し「封切り」という言葉をうみだしたと言われる。のちに横浜東亜映画劇場、横浜松竹映画劇場、連合国軍占領下ではオクタゴンシアターと改称した。2000(平成 12)年に閉館。

*捕虜収容所

戦時色の高まりを背景に 1943(昭和 18)年を最後に野球大会が中止され、グラウンドは芋畑となった。その後軍隊に接收され、捕虜収容所となった。

*株主募集

横浜スタジアム建設資金を集めるために、一口 250 万円の株券が発行された。購入者には横浜スタジアム、内野指定席一席が 45 年間貸与された。

*フライヤージム

1945(昭和 20)年進駐軍の体操場として伊勢佐木町に建設。

1953(昭和 28)年接收が解除になり、巨大なかまぼこ型の建物は横浜公園に移った。

*森正

(1921~1987)
フルート奏者としてデビュー。その後、指揮者に転向し東京交響楽団、藤原歌劇団、京都市交響楽団の常任指揮者を歴任。1979(昭和 54)年より NHK 交響楽団の正指揮者を務めた。

うんですね。だから初めは、私が行ったのは伊勢佐木町にあったのと、それとどう違うのかなというのが疑問だったんですね。それであの、調べてみたら昔の地図にフライヤージムの位置が今の、弘集堂さんという本屋さんは昔からありますよね。丁度あの弘集堂さんはね、逆の方にあっただすよね、前は。で、あの辺りにフライヤージムってのがあって、そこの道路に面していて、そこで音楽会をやって、で、森正が来て、確かあのときにみんなで聴きに行って、で、やった曲もラデッキー行進曲と、それから何か幾つかですね、有名な曲をやって、初めてオーケストラって聴いたのを覚えているので、それで今、おっしゃったのは私もそこだとばかり思ってたんですよ、あの平和球場の横のところかなと。

○藤澤：私は昭和 35、6 年の頃はあそこはフライヤージムって、僕ら言ってたんですけどね、違ったか。

○男性：ああ、いや、そうじゃないの。私のはね、もうちょっと前です。私はね、昭和 27 年ぐらいですから、あの、言われてるとおりに移転している可能性があります。どうもすいませんでした。

地名の話あれこれ

○男性：ちょっとパネラーの方にお聞きしたいんですけど、大したことじゃないんですけど、あの、今、大棧橋(おおさんばし)*って言ってますね。あれ、僕なんか子どもの頃は大棧橋(だいさんばし)って言ったんですよ。で、ローマ字ではずっと<OSANBASHI・オサンバシ>って書いてあって。というのはこの間ですね、外国の人からね、「おさんばし、これでいいのか」

って聞かれたわけなんです。最初僕はオサンバシって何かなあと思ったら、要するに大棧橋(おおさんばし)のことなんです。<おおさんばし>ってのは僕なんかはくだいさんばし>なんです。これ、どうなんですかねえ。まあ、どうってことない話かも知れませんが、で、僕なんか、棧橋には月に何回も船を見に行きましてね。で、そのときは何も<おおさんばし>だとか<くだいさんばし>なんて関係なかったんですけど、最近あれ見てみるとみんな、<おおさんばし>、<OSANBASHI・オサンバシ>って書いてあるんだよね。だからおかしいなあと思って、どっちが正しいっていうか、何ていうんですかねえ。僕なんか<おおさんばし>っていう、

それがどうしても頭に入りますもんで、そこんとどうなんですかねえ。大した問題じゃないかも知れませんが。

○森：あの、よろしいですか。あの、大小みたいな漢字は平仮名ふらないもんですから、その辺でわかんなくなっちゃうケース、あるんじゃないかと思うんです。で、私が子どものときは<おおさんばし>っていう言い方、既にしまして、大学、東京だったものですから、そこで会った友達が<くだいさんばし>っていうもんだから、いや、あれは横浜では<おおさんばし>っていうんだって、直させた記憶があります。それで、そういったものはほかにもたくさんあって、簡単な小学校で出てくる漢字の振り仮名はふらないので、読み方は微妙に変わる可能



*大棧橋 (絵ハガキ『(大横浜名所) 大棧橋 Pier of Yokohama』より) (1923-1940) (横浜中央図書館所蔵)

横浜港にある埠頭のひとつ。「メリケン波止場」とも呼ばれ港の観光の中心。横浜港唯一の客船埠頭でもある。大棧橋入口から突端まで全長 966m。1 万トン級の船が 6 隻接岸でき、時には 6 万 7 千トンの大客船も停泊する。

性ってあるんじゃないかと思います。

○藤澤：そうですね、この間の震災でもそうですね。大津波(おおつなみ)、大津波(だい
つなみ)ってあるしね。大震災(だいしんさい)、大震災(おおしんさい)。あの辺もだから
大(おお)と大(だい)がどういうふうにあれかって、すごく疑問なんですけどね。私も
<おおさんばし>って言ってたんですけどね。学生時代、丁度ね、1970 年ちょっと前で
したかね、65、6 年だったか、あそこにね、<おおさんばし>に行く手前にジャパンエ
クスプレスって会社がありましてね。そこでアルバイトやったことあるんですよ。で、
当時、栈橋にナホトカから、ロシアですかね、客船が着きましてね。その客船の中から
バゲッジをですね、こう、上に上げていく、そんな仕事をですね。それからトラックの
上乗りだとか。今の赤レンガ倉庫が当時まだ稼働してましてね、赤レンガ倉庫の中でで
っかい、何かほこりだらけの袋を担いであちこち動かしたりとか。それから、もっとす
ごいのは、沖にある船から船への荷物の上げ下ろしですね。私はやんなかったんですけ
ど私の弟がアルバイトに行ったときに、丁度たまたまこの仕事に回されて、それで生の
牛の皮をですね、かぶらされて、それであの、もう下、40 メートルぐらいの海面のと
ころを僅かなこんな、こんなようなところを渡らされて、で、頭からべたべたになって帰
って来た、そんなようなことを覚えてますね。1970 年ちょっと前ですから 40 年ちょっと
前ですかね、そんなようなアルバイト、港の周りでね、学生達が随分やってたなってな
ことを、あの周辺のことをふと思い出します。

○森：ここに参加させていただく上で私はちょっとお聞きしたいことがひとつだけあり
まして、それは町名なんです、金の港、金港町(きんこうちょう)*ですね。これ、現在
のそごうの辺りが金港町なんです、これは小学校のときですから昭和 30 年代前半です
が、小学校の先生から、金港っていうのは、国にとっての主力の第一港のことを、表玄
関のことをゴールデンポートという。で、ゴールデンポートの直訳が金港であるという、
そういうふうに聞いた記憶がありまして、これは子どもながらに横浜は金港なんだと誇
りに思ったもので、えー、50 年も経っても記憶しているわけなんです、この金港って
言葉がほとんど死語になっています。

それで金港タクシーとか金港スポーツとかあるんですね。それで金港タクシーの運転
手さんに聞くと、多分本社が金港町にあったからじゃないかっていうような話しか出て
きません。それから横浜市の、こちらプロがいっぱいいますけど、本の中にね、横浜
市の町名の辞典*のような本があるんですね。それで私も金港町を見たんですが、錦の港
であるから、それが金港になったっていう記述しかないんですよ。で、小学校の先生、
もうお亡くなりになっちゃってますから、これ、どうなったのかって、で、辞書を調べ
ますとゴールデンポートそのものが辞書に載ってないんですね、新しい辞書には。その
辺の調査の仕方は私、学問に弱いんで出来ないんですが、どなたかその辺、お調べいた
だけるとありがたいなと、御教授願えたらと思っているんです。で、これは横浜税関の
前を通りかかったときに、そこの課長さんにお会いして、たまたまお会いしたその人は
ちょっと知っているんですよ。

で、そういうことで六つ港*を開いて、神戸、新潟、函(箱)館とか開港時に開いたとき
にくじ引で決めたんだそうで、長崎が元々、開港前の江戸時代から長崎が国際港であっ
たので、長崎を第一の港とすべきであるというようなことだったらしいのですが、くじ
引で横浜が第一の港を射止めた。つまり横浜が日本の表玄関になったということですね。
で、これが今はエアポートの時代。飛行場が港になったわけで、エアポートですね。そ

*金港町

(横浜市神奈川
区)「金港」の由
来は「金川(神
奈川)の港」と同
時に「錦(にしき)
の港」を意味し、
横浜港を指す」
とある。(転載/
『横浜の町名』
(横浜市発行) 34
頁より)



*横浜市の町名の 辞典

『横浜の町名』
(横浜市民局総
務部住居表示課、
1996 年刊)を指
す。横浜市内の町
名を区別に紹介。
町名の設置時期、
由来などが解説
されている。

*六つの港

1858(安政 5) 年
日米修好通商条
約で開港となっ
たのは、横浜、長
崎、函館、新潟、
神戸の 5 港。日米
和親条約(1854 年
調印)で開港した
下田と併せて 6
港となる。下田は
1859 年に閉港。

れでいくと第一港は成田なのかどこなのかって言う、そういういろんな疑問がわいてくるんです。これ、先ほどの、私も＜だいさんばし＞って子どもの頃に言っていた記憶もあるんですね。それ、非常に曖昧な部分でして、こういうような庶民の集いつて言いますと失礼な言い方になっちゃうのかも知れませんが、市民史ですね、要するに民衆史。これは非常に、文献に残りにくい部分が結構話されるわけですね。ですからそういったことにおいてちょっと私が横浜市の町名で気になっているのは金港町という町名が何だったのかということですね。それから、それに対して、では銀港町というのがあるのではないかと思います、神戸市役所に電話で問い合わせたんですが、神戸市内には銀港町という町名はないそうです。この辺もまさか小学校の先生がでたらめ言ったとも思えないんですが、どこにも載ってないんです、正直言います。ですから、この場でちょっと投げかけるといって大げさなんですが、ささやかな話なんですがね、実はね。ただ、その＜おおさんばし＞、＜だいさんばし＞ひとつにとってもですね、本を読んでも平仮名はふる必要のないような簡単な用語については時代とともに変わっていく。平気で変わっていつちゃってどれが正しかったのかわからない。ただ、それで生命、関係ないんですけれどね、ただ、そういう意味でこういう会っているのは私は必要だと思っておりまして、長くなりましたが最後に発言させていただきました。どうも。

○男性：年配の方に聞きたいんですけども、私も年配なんですけど。昔の地図を見ますと今の棧橋ですけど、南埠頭って表示があるんですよ。で、中央埠頭ってのが今はもうなくなりましたが、昔、引き込み線がありまして、中に税関みたいなのがあって、あそこに直接、東京から来た人が入って、アメリカ航路だったと思うんですね。で、メリケン波止場っていうのも昔、言葉があったんですよ。だから私なんかは昔の地図を見ると、あれ、南埠頭。中央埠頭ってのは既になくなりましたけれど、私は写真、撮っておきましたけど、引き込み線があって、中にステンドグラスなんかがあって、で、結構立派なのが残ってたんですね。

だから＜おおさんばし＞っていう、私も＜だいさんばし＞ってあまり聞いたことないんで＜おおさんばし＞っていう言葉だったんですね。で、今もおっしゃったように確かにオーラルヒストリーっていうか、結構大切なんですね。で、これ、ちょっと変な話なんですけど小林さんに質問なんですけどね。こう、ものの、地名の呼び方ってありますよね。で、例えば関内(*1＝＜かん＞強調読み)とは言わないはずなんですよ。私ね、関内(*2＝＜かんない＞平坦読み)って言ったはずなんですよ。昔の人は。小林さんなんかは関内(*2)だと思うんですよ。それからね、呼んでるときにおかしいのはですね、綱島(*2)＜つなしま＞＝平坦読み)って言うんですよ。あの、東横線は。あれ、綱島(*1＝＜つな＞強調読み)なんですよ。だから昔から住んでいる人はね、そんなのどうだっていいっていやいいんですけどね。やっぱりそういうところから変わっていくのかなと思うんですけども、けど私は関内(*2)はね、ものすごくね、拘っていてね、うちじゃあ昔から、明治時代から横浜の人間ですからね。小さいときから関内(*2)、関内(*2)って言われてたのに、いつからか関内(*1)、関内(*1)って言うてるから、うちの息子も私に、いやあ、あれはおかしいって言うんですけどね。まあ、それはいいんですけども、そういうのを正せとはいわないけど、変わっててもいいんだろうけど、結構知らないうちにですね、まあ、横浜はいろんなところの人が来るから、そうなっちゃうんでしょうけども、小林さんなんかはいろんな立場があるでしょうから、そういうようなところをもう一回整理していただいて、ああ、本当はこう読むんだよっていうのをですね、言っていたきたいと思います。どうもすいません。

○小林：大変難しいことなんですけど、私は関内(*2)ということですね、＜かん＞にあまり力を入れないで関内といっておりますけれども、若い人達は関内(*1)って言う、いつ頃からで

しょうかねえ。そう言われるようになりましたね、ええ。関内(*1)って<かん>の方に力を入れるんですね。どうでしょうか、これは。やはり大事な提言ですね。

○司会：ありがとうございます。

○森：えーと、関内(*2)っていうふうに聞いてた記憶があるんですね。関内(*1)と関外(*3=<かん>強調読み)じゃないですか。外と内で。関内(*2)ですよ。

○男性：祖父があので仕事をやってたんで多分、間違いないんじゃないかと思うんですけどね。今、おっしゃるように。

○藤澤：関外(*4=<かん>強調読み)だと変ですよ、明らかに。対になっている言葉だから関内(*2)の方が正しいのではないかと。気がしますが。昔はあのを関内(*2)牧場って言ってたんですよ。関内(*1)牧場じゃないですよ。

○男性：私は後から横浜に来た人間なんで、並みいるネイティブ横浜っ子にはあれなんですけども、えーと、駅の名前の呼び方に対しては多分、普通の人に関内(*1)って言ってて、普通の人というか、これくらいの年代の人は関内(*1)っていう人のが多いんだと思うんですけど、我々よりもずっと若い人は日本語の全体の発音の平板化の中で関内(*2)っていう言い方をすると、逆になってると思うんですよ。

それで、JRの車内放送というか駅に付いてるホームの放送なんですけど、あれ、気がついたんですけど二つ言ってるんですよ。最初、関内(*1)って言って次、関内(*2)って言ってるんです。で、桜木町も。いや、二回言ってるんですよ。で、桜木町も桜木町(*1=<さくら>強調読み)って言って、次に桜木町(*2=<ぎちょう>平坦読み)って、違う発音で別々、二回言ってます。私はだから最初のが年寄り向け、我々向けで、（会場から笑い）二回目のがもっとかなり若い人、30代くらい以下の、ええ、もう変わろうとしているのが二回目に言ってます。だから渋谷もそうですね。渋谷(*2=<しぶや>平坦読み)、渋谷(*1=<しぶ>強調読み)とか何とか。あの、皆さんそういうふうにつけて言っていると。あの、年寄り発音と若い発音と両方言ってますんで。（会場から笑い）

全然ちょっと関係ないんですけど、それで私、新参の横浜なんで、ちょっとあの、せっかくなんで教えてほしかったんですけど、市電の話にちょっと戻って申しわけないんですけど、桜木町と高島町の間の雪見橋の辺りに、多分市電のせいだと思うんですけど道が斜めに走っているところがあって、で、さっき高島町の交差点がすごいことになってたっていう話があったんですけど、何で高島町で回らないで、あそこの斜めの道があるのかっていうのがずっと疑問だったんですけど、どなたか御存知の方がいたら教えていただきたいと。

○司会：どなたか。いらっしゃいますか。では、お願いします。

○男性：あの、市電に関係ないと思うんです。あれ、斜めにある道はですね、えーと、岩亀楼(がんきろう)*とかっていうのがあったところで、あれは、あそこは川でしたから。今、道路になっているところは。川ですから市電が通るわけではないと思うんで、川の上を走ることはないんで、橋があっただけですから多分、それはないと思いますね。

○小林：あの、これは私の記憶ですけど、確か岩亀横丁(がんきよちょう)*からですね、あそこに横浜ドック*の入口があったんですね。それに合わせたと私は思うんです。そのためにちょっと斜めになってたと思いますけども。いかがでしょうか。それから先ほどの駅名なんですけれども、隣のお婆さんがですね、次の駅はどこですかと言ったら「きくな(菊名)」って言ったってんで。（会場から笑い）これ、落語の世界で菊名(聞くな)、で、

*岩亀楼

港崎遊郭にあった遊郭。岩亀楼は中でも当時珍しい三階建ての本店（おおだな）で、内装や華麗な踊り舞台などから「さればひとたび此の楼に遊べるものは、魂有頂天にのぼり、更に家に帰るのを忘れるべし」と歌われた。しかし1866(慶応2)年、1871(明治4)年、二たび火難に遭い、高島町に移転。高島町でも岩亀楼は三階建ての楼閣が夜目にも美しかったと伝えられている。

*岩亀横丁

現在も西区戸部に残る通りの名前。名の由来は、岩亀楼の遊女が静養のため利用した寮がこの通りにあったことから。

○司会：面白い笑い話がありました。では、そろそろもうお時間が4時半になろうとしておりますので、ここら辺で今回のパネルディスカッションを終わろうと思います。昭和53年の横浜スタジアムの完成までのお話がありまして、そのあと、まあ、横浜接収が解除されたりとか、みなとみらいの開発があつたり、いろいろなことが起こり今に至るわけです。

前回のパネルディスカッションと今回のパネルディスカッションで90年前からの横浜の様子、皆さんの暮らしの様子を、本に載ってない情報までいろいろお聞きできたのはとてもよかったなと思いますし、皆様にこうやって積極的に御参加いただいて、とても嬉しかったです。今回、90周年事業ということでこのような機会を設けましたが、また皆さんでこのようにお話しできる機会があれば御参加いただければと思います。

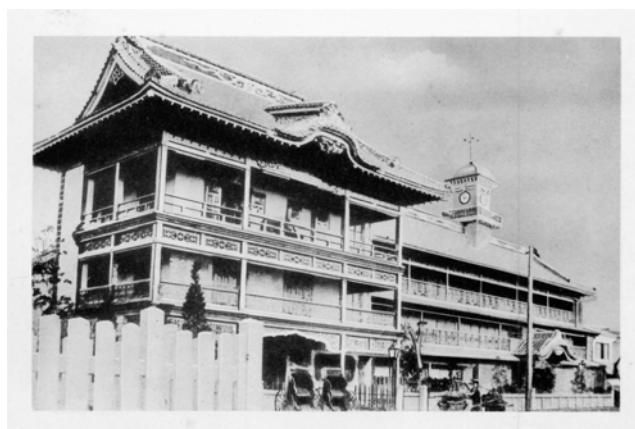
では、本日はこれで終了したいと思います。どうもありがとうございました。
(会場から拍手)

*横浜ドック

イギリス人技師パーマー(日本初の近代水道を横浜に建設)が基礎設計した石造ドライドックのこと。パーマーの死後は日本人技術者たちによって実施設計と施行がなされ、1896(明治29)年に完成。安山岩約3万5千個によって築かれたこのドックでは、昭和50年代まで、多くの艦船の修理がなされた。現在はドックヤードガーデンと呼ばれ市民が憩う広場となっている。国の重要文化財。



岩亀楼 (錦絵『横浜岩亀楼上』(二代目広重、1860)より)
(横浜市中央図書館所蔵)



高島町遊廓岩亀楼 (『開港七十年記念横浜史料解説』(横浜市、1928年発行より))